保存用

大学研究ノート
第21号 (1976年1月)

大学英語教育に関するアンケート調査

—広島大学における学生の意見—

五十嵐　二　郎　　稲　田　勝　彦
岩　村　　聡　　藤　本　黎　時
湯　浅　信　之

広　島　大　学
大学教育研究センター

目　　次

Ⅰ　アンケートの目的 …… 1
Ⅱ　アンケートの作成と実施 …… 1
Ⅲ　アンケートの内容と結果 …… 2
Q 1　高校時代の英語への興味 …… 2
Q 2　高校時代に英語が嫌いだった理由 …… 2
Q 3　高校時代の英語学習経験 …… 3
Q 4　英語入試問題の難易度 …… 4
Q 5　英語教育への満足度 …… 4
Q 6　英語教育への不満の理由 …… 5
Q 7　英語学習への積極性 …… 6
Q 8　英語学習への目的意識 …… 6
Q 9　他の外国語学習との関係 …… 8
Q10　外国語必修制への意見 …… 8
Q11　クラス規模への希望 …… 9
Q12　予習復習時間 …… 9
Q13　不可取得の原因 …… 10
Q14　授業欠席回数 …… 11
Q15　聴講授業形式 …… 11
Q16　希望の授業形式 …… 12
Q17　授業頻度・時間への意見 …… 13
Q18　ＬＬ聴講経験 …… 14
Q19　ＬＬの目的 …… 14
Q20　ＬＬへの満足度 …… 14
Q21　ＬＬへの不満の理由 …… 15
Q22　ＬＬへの満足の理由 …… 15
Q23　ＬＬへの希望 …… 16
Q24　テープ・レコーダーを使用した授業の聴講経験 …… 16
Q25　テープ・レコーダーを使用した授業の形式 …… 16
Q26　テープ・レコーダーを使用した授業への満足度 …… 17
Q27　外人教師の授業の聴講経験 …… 17
Q28　外人教師の授業の内容 …… 18
Q29　外人教師の授業の効果 …… 18
Q30　外人教師の授業への意見 …… 18
Q31　使用教科書の種類・冊数 …… 19
Q32　使用教科書への評価 …… 20
Q33　授業選択制への意見 …… 21
Q34　教科書への希望 …… 21
Q35　英語教師への評価 …… 22

Q36　英語教師の専門分野への意見 …… 25
Q37　課外の英語学習経験 …… 25
Ⅳ　結　　語 …… 27
Ⅴ　あとがき …… 28

〔附記〕　一般教育における英語の授業の概要 …… 29
〔附録〕
(1)　大学における英語教育に関するアンケート　質問紙
(2)　大学における英語教育に関するアンケート　回答用紙

大学英語教育に関するアンケート調査

―広島大学における学生の意見―

五十嵐二郎（教育学部東雲分校）稲田勝彦（総合科学部）岩村　聡（総合科学部）
藤本黎時（総合科学部）湯浅信之（文学部，大学教育研究センター研究員）

Ⅰ　アンケートの目的

大学における英語教育の変革が求められるようになってから，既に久しい。広島大学においても，比較的たやすく採用できるものから，新しい試みが実施されつつある。しかし，従来の試みが，必ずしも十分な効果を収めるに至っていない原因の一つに，学生が果して何を求めているかについての十分な調査がなされなかったことがあると考えられる。このアンケートは，かかる認識に基づいて，(1)学生の英語学習の実態調査，(2)学生の学習意欲，目的意識の調査，(3)学生の授業に対する満足度の調査，(4)学生の求めている学習形態の調査，(5)既に行なわれている実験的試みの評価，(6)学生の学習態度に内在する諸問題の調査等を主目的とし，学生側の意見を反映するために行なったものである。このアンケートは大学における英語教育を対象としたものであるが，広く大学の大衆化の問題にもいくつかの示唆を与え得るものと信ずる。

Ⅱ　アンケートの作成と実施

アンケートの作成は，プロジェクト・チーム全員の半年にわたる討議の結果行なわれた。アンケートは，文学部，教育学部，総合科学部で試験的に予備調査を行ない，更に改訂した後本格的に実施された。

プロジェクト・チームは，総合科学部（一般教育担当）から３名，文学部，教育学部東雲分校から１名ずつ，計５名の構成である。このうち４名は英語関係者で，１名は学生相談室関係者である。

アンケートの実施時期は，昭和50年２月である。この時期は，ちょうど２年生が学部に進学する直前であり，１年生が既に１年間にわたって，大学での学習を続けた時期である（附記 P.29~30 参照）。

アンケートは，総合科学部（教養部）で英語を受講している学生全員を対象に実施された。英語の授業の一部をさき，アンケートを実施し，その場で回収が行なわれた。回収数は昭和49年度入学の１年生で 1,418名，すなわち総合科学部で一般教育を受講している昭和49年度生の71.８％，昭和48年度入学の２年生で 871名，46.6 ％であった。これはアンケートが実施された時の出席者のほぼ全員である。

Ⅲ　アンケートの内容と結果

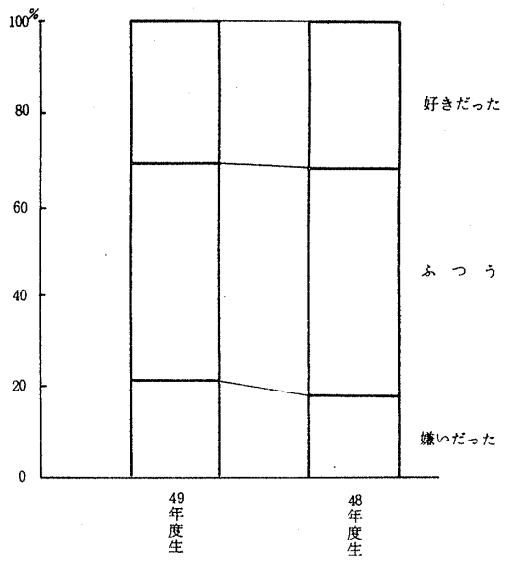
Q 1　高校時代の英語への興味（全員回答）

あなたは，高校時代に英語が好きでしたか。

(1) 嫌いだった。 (2) ふつう。どちらとも言えない。 (3) 好きだった。

「(2)ふつう」と答えたものが，49年度生で48％，48年度生で50％に及ぶ。「(3)好き」と答えたものは49年度生で31％，48年度生で32％で，予想以上の高い率である。「(1)嫌い」と答えたものは，49年度生で21％，48年度生で18％と低率である。このことは広島大学に入学して来る学生の中には，全般的に高校時代にあっては英語に関心を持っていたものが比較的多いことを物語るものであろう。

Q 1　高校時代の英語への興味



学部差はそれほど顕著ではないが，全般の傾向とは逆に，「(1)嫌い」と答えたものが，「(3)好き」と答えたものを上回った学部は，49年度生では，政経学部第二部，理学部，水畜産学部であり，48年度生では，政経学部第二部である。「(3)好き」と答えたものが，「(2)ふつう」と答えたものを上回った学部は，49年度生では，総合科学部，教育学部福山分校であるが，48年度生には見当らない。

当然のことながら，「英語専攻生」(文学部文学科英語学英文学専攻，教育学部高等学校教員養成課程外国語科専攻，教育学部中学校教員養成課程外国語科専攻)では，49年度生で71％，48年度生で78％が，「(3)好き」と答えており，特殊性を発揮している。

男女差では，「(1)嫌い」と答えたものが，49年度生では，男性23％，女性18％，48年度生で，男性21％，女性14％であり，「(3)好き」と答えたものが，49年度生で，男性28％，女性37％，48年度生では，男性30％，女性36％と，かなり女性の方が英語に高い関心を持っていたことがわかる。

Q 2　高校時代に英語が嫌いだった理由（嫌いだったもののみ回答）

上の問いで，「(1)嫌いだった」と答えた人は，その理由を下記のうちから最大限２位まで選んで下さい。

(1) 先生が嫌いだった。 (2) 教科書の内容が面白くなかった。 (3) 授業内容がむずかしすぎた。

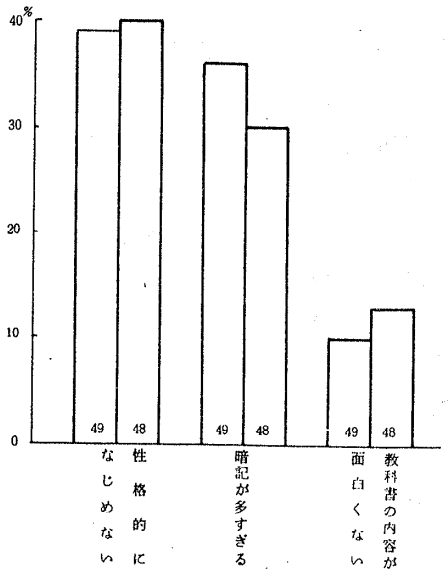
(4) 性格的に英語になじめなかった。 (5) 暗記することが多すぎて苦手だった。 (6) その他。

２位まで選択させた回答のうち，１位だけの集計結果では，「(4)性格的になじめない」が最も高率を示し，49年度生で39％，48年度生で40％であった。これは既に高校時代に英語に拒否反応を示した学生がおり，絶対数では少数とは言えそのまま大学に入学していることを示している。次いで，「(5)暗記が多すぎる」が高率を示し，49年度生で36％，48年度生で30％に及ぶ。「(2)教科書の内容が面白くない」も，49年度生で10％，48年度生で13％あり，無視できない。

その他の理由は10％以下で，高校時代では，教師とか授業内容とかに対する苦情は比較的めだたないようである。

男女差について顕著な傾向は見当らなかったが，49年度生では，男性が「(4)性格的になじめない」を第一の理由にしたのに対し，女性が「(5)暗記が多すぎる」を第一の理由にしている点が違っている。しかしこの傾向は48年度生にはみられない。

Q 2　高校時代に英語が嫌いだった理由



Q 3　高校時代の英語学習経験（全員回答）

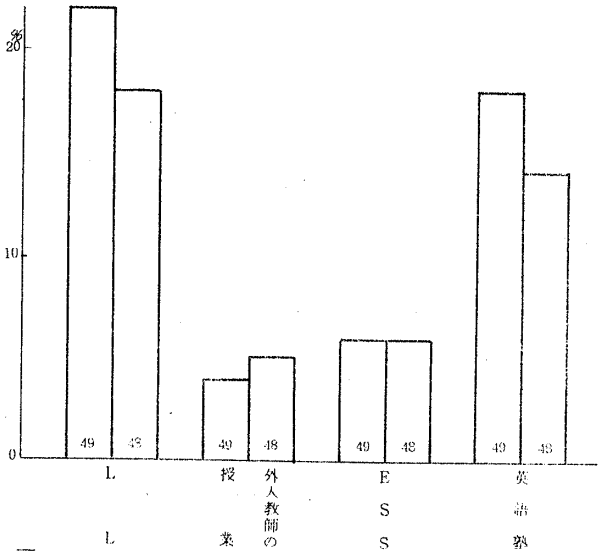
あなたは高校時代に次のような形で英語を学んだことがありますか。もしあれば，約何年間学んだか，平均して週当り約何時間学んだかを記入して下さい。

(1)　ＬＬ（語学演習装置）を利用した授業。　(2)　外人教師の授業。　(3)　ＥＳＳ（英会話クラブ）などの課外活動。　(4)　英語塾，予備校などの補習授業。

この質問は高校時代に普通の授業形式以外の形態でどの程度英語を学んだかを調査するものであるが，「(1)ＬＬ」では，49年度生で22％，48年度生で18％の学生が半年以上にわたってこの形式の教育を受けた経験を持っており，ＬＬの普及がかなり進んでいることがわかる。「(2)外人教師の授業」は，49年度生で４％，48年度生で５％と低率である。「(3)ＥＳＳ」も，49年度生，48年度生ともに６％と低率である。「(4)英語塾」は，49年度生で18％，48年度生で14％と予期したほどの高率を示さなかった。全般的に眺めれば，「ＬＬ」と「英語塾」が比較的高率を示したが，「外人教師」と「ＥＳＳ」は問題にならない数値である。このことは高校時代の英語教育で「話す能力」の養成が全く未解決の問題であることを物語っている。「ＬＬ」，「外人教師」の授業も，週１時間１年以内という期間が圧倒的に多く，この点で問題が残されていることがわかる。他方，「ＥＳＳ」，「英語塾」の方は，週数時間，約３年という期間が高率を示し，永続的な努力がなされていることがわかる。

当然のことながら，この問題では学部差は認められないが，「ＥＳＳ」に関しては，「英語専攻生」が一般の学生よりはかなりの高率で活動に参加していたことが明らかである。すなわち，49年度生，48年度生ともに一般が５％であるのに対し，「英語専攻生」は，49年度生で27％，48年度生で30％であった。

Q 3　高校時代の英語学習経験



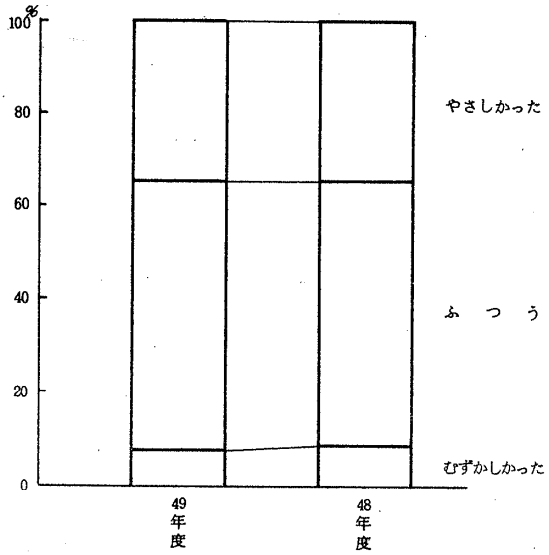
Q 4　英語入試問題の難易度（全員回答）

あなたは，広島大学入学試験における英語の問題の難易度についてどう感じましたか。

(1) むずかしかった。 (2) ふつう。どちらとも言えない。 (3) やさしかった。

「(1)むずかしい」と答えたものは，49年度生で８％，48年度生で９％にすぎず，「(2)ふつう」と答えたものがいちばん高率で，49年度生で58％，48年度生で57％にのぼっている。「(3)やさしい」と答えたものも，49年度生，48年度生とも35％と，相当数にのぼっている。従って，入学した学生についてみる限り，広島大学の入学試験の英語の問題は比較的やさしかったという印象を持っているようである。

Q 4　英語入試問題の難易度



学部別にみると，「(2)ふつう」と答えたものより，「(3)やさしい」と答えたものが上回った学部は，49年度生では，総合科学部，歯学部であり，48年度生では，医学部である。逆に，「(1)むずかしい」と答えたものが，目立って多かった学部は，49年度生，48年度生ともに，政経学部第二部である。特筆すべきは，「英語専攻生」が，必ずしも英語の問題がやさしかったと感じていない点である。すなわち，49年度生，48年度生ともに，「(2)ふつう」と答えたものが，「(3)やさしい」と答えたものを上回った。

男女差もわずかながら認められ，「(3)やさしい」と答えたものが，49年度生では男性38％，女性29％，48年度生では，男性39％，女性28％と，いずれも男性の方がやさしかったという印象を持っているようである。

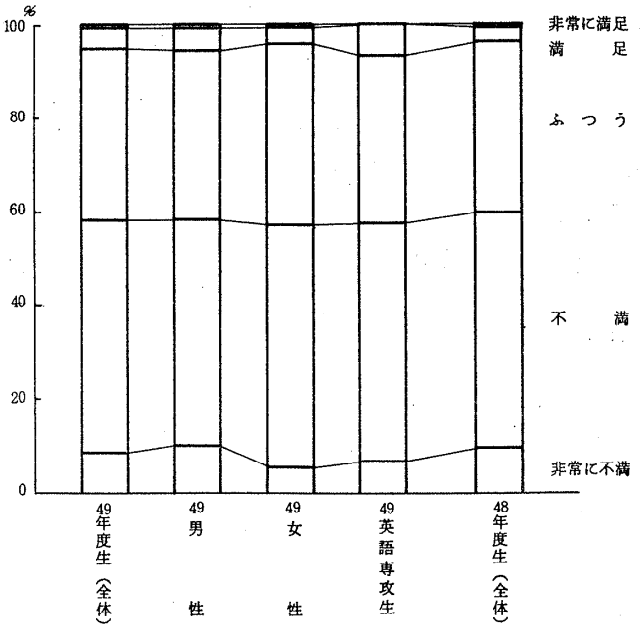
Q 5　英語教育への満足度（全員回答）

あなたは一般教育としての英語にどの程度満足していますか。

(1) 非常に不満である。 (2) 不満である。 (3) ふつう。いずれとも言えない。 (4) 満足している。 (5) 非常に満足している。

「(2)不満」と答えたものがいちばん多く，49年度生で50％，48年度生で51％にのぼる。「(1)非常に不満」と答えたものも，49年度生で８％，48年度生で10％あり，大学の英語教育に対する不満度は相当に強いと判断しなくてはならない。「(3)ふつう」と答えたものは，49年度生で37％，

Q 5　英語教育への満足度



48年度生で36％あった。「(4)満足」と答えたものは，49年度生で４％，48年度生で３％であり，「(5)非常に満足」と答えたものに至っては，49年度生，48年度生ともに１％以下で問題にならない。不満を持つ学生が相当数いることも問題であるが，満足を感じる学生の少ないことの方が，より深刻な問題だとも言えよう。

学部別では，特に目立った傾向はみられないが，49年度の教育学部福山分校では，「(2)不満」と答えたものより，「(3)ふつう」と答えたものが，わずかながら上回り，やや満足度が高いようである。

男女差でも顕著な傾向はみられないが，「(2)不満」と答えたものが，49年度生で男性49％，女性52％，48年度生で，男性47％，女性57％と，やや女性の方が高い不満度を示している。

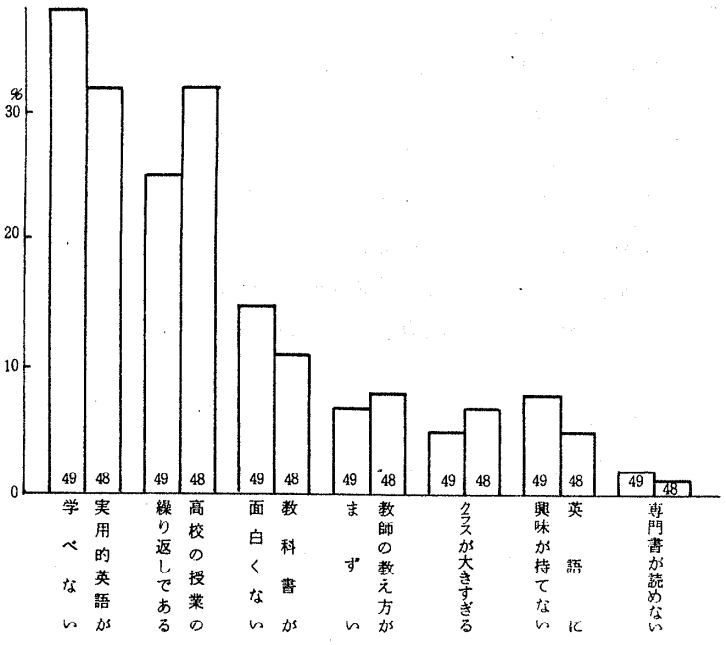
Q６　英語教育への不満の理由（不満のもののみ回答）

上の問いで「(1)非常に不満である」または「(2)不満である」と答えた人は，その理由を下記のうちから最大限２位まで選んで下さい。

(1)　教師の教え方がまずい。　(2)　教科書が面白くない。　(3)　クラスが大きすぎて集中できない。　(4)　高校の授業の繰り返しである。　(5)　英語に興味がないので面白くない。　(6)　会話や作文など実用的英語が少ないので不満である。　(7)　専門書が読めないので興味がもてない。(8)　その他。

２位まで選択させた回答のうち，１位だけの集計結果では，「(6)実用的英語が学べない」を理由とするものが，49年度生で38％，48年度生で32％あり，最も高率である。次いで，「(4)高校の授業の繰り返しである」を理由としたものが，49年度生で25％，48年度生で32％と続く。従ってこの二つが主な理由と判断できるわけで，学生は従来勉強しなかった方面の学習を大学に望んでいることが明らかである。「(2)教科書が面白くない」を理由としたものは，49年度生で15％，48年度生で11％である。これは，無視できない数値ではあるが，上記の二つの理由に比べれば低率である。次いで，「(1)教師の教え方がまずい」を理由としてあげたものが，49年度生で７％，48年度生で８％と続くが，比較的低率である。しかし，学部差が相当はっきりと出ており，比較的英語を得意とすると思われる学部において高率を示していることは注目に値する。「(3)クラスが大きすぎる」を理由とするものは意外と少なく，49年度生で５％，48年度生で７％であった。しかし「英語専攻生」の間では10％以上のクラスに対する不満があり，注目すべきである。「(5)英語に興味が持てない」を理由とするものは，49年度生で８％，48年度生で５％と少ない。49年度生では学部差が顕著であり，文

Q６　英語教育への不満の理由



学部，教育学部，教育学部東雲分校，政経学部第二部，水畜産学部では10％以上の高率を示している。48年度生では顕著な学部差はみられない。「(7)専門書が読めない」を理由とするものは，49年度生で２％，48年度生で１％と極度に少ない。これは学生の実用主義，専門ばなれの傾向を示すものであろうか。

この質問では，男女差は認められなかった。

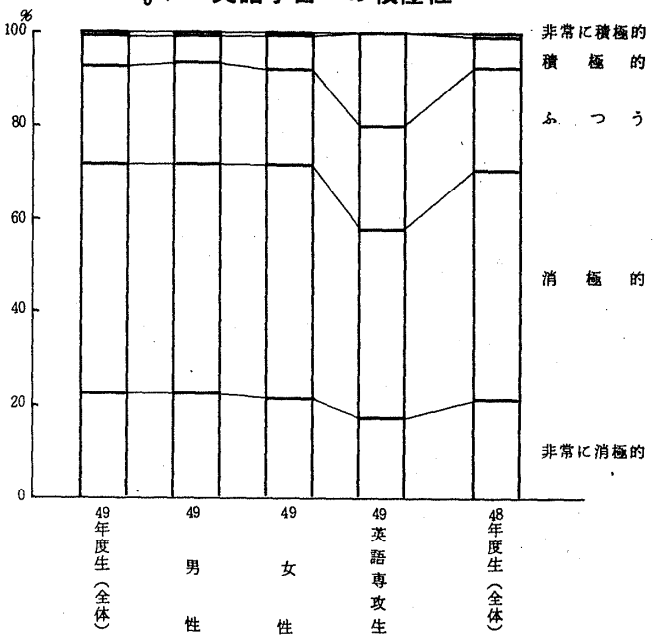
Q７　英語学習への積極性（全員回答）

あなたは。大学入学後，英語の勉強に積極的に取り組んで来ましたか。

(1) 非常に消極的だった。 (2) 消極的だった。 (3) ふつう。いずれとも言えない。 (4) 積極的だった。 (5) 非常に積極的だった。

「(2)消極的」と答えたものが最も高率を示し，49年度生で50％，48年度生で49％にものぼる。「(1)非常に消極的」と答えたものも，49年度生，48年度生ともに22％あり，全体の７割を越える学生が消極的な学習態度である。「(3)ふつう」と答えたものは，49年度生で21％，48年度生で22％であった。「(4)積極的」と答えたものは49年度生で６％，48年度生で７％であり，「(5)非常に積極的」と答えたものは，49年度生，48年度生ともに１％にみたなかった。この結果はきわめて憂慮すべきものであろう。英語だけに限ったことではないが，このような消極的な学習態度では前進は望めないのは当然で，反省させられる。

Q７　英語学習への積極性



この質問では，かなり顕著な学部差が認められ，49年度生では，総合科学部，教育学部，48年度生では，医学部，歯学部が，「(4)積極的」と答えたものが10％を越えている。また当然のことながら，「英語専攻生」は，49年度生，48年度生ともに20％以上が「(4)積極的」と答えており，他とは比較にならない。しかし，このような積極性の高い学生が比較的多い学部でも，全体の傾向は消極的で，例外と考えられる学部はなかった。

この質問では，男女差は認められなかった。

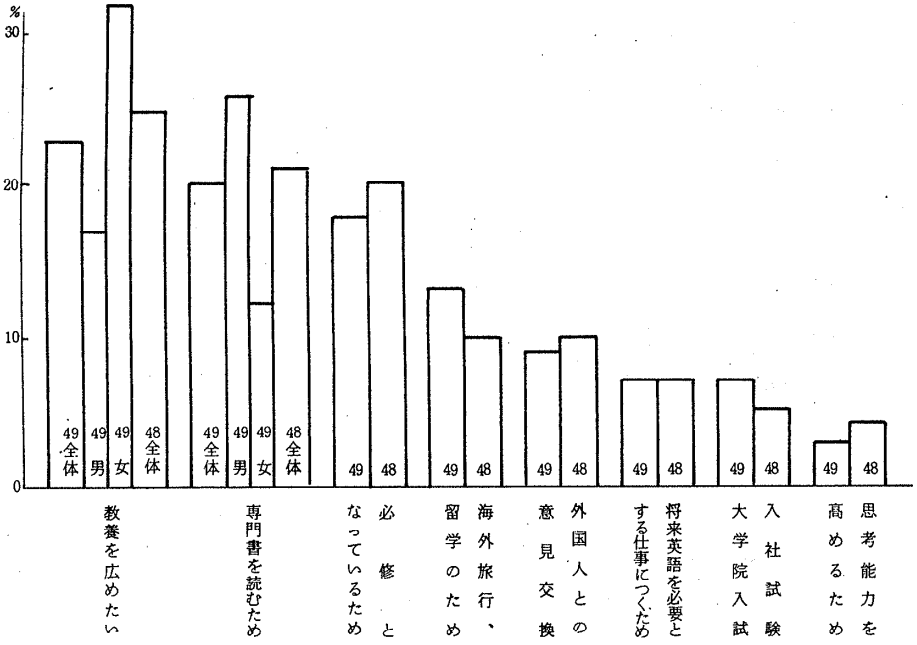
Q８　英語学習への目的意識（全員回答）

あなたは主として，どんな目的で英語を勉強したいと考えていますか。最大限２位まで選んで下さい。

(1) 専門書を英語で読むため。 (2) 将来英語を必要とする仕事につきたいため。 (3) 海外旅行や留学をしたいため。 (4) 外国人と意見を交換したり，自分の思想や研究を英文で発表したいため。 (5) 英語を通して教養を広めたいため。 (6) 英語を通して思考能力を高めたいため。 (7) 入社試験，教員採用試験，大学院入試等に備えるため。 (8) 大学で英語が必修科目となっているため。 (9) その他。

今日の大学教育の混乱は，大衆化とともに目的が多様化したことに起因することが指摘されているが，英語教育の面でも如実にこの傾向が明らかとなった。2位まで選択させた回答のうち，1位だけの集計結果によると，諸目的のなかで，最も高率を示したものは，「(5)教養を広めたい」で，49年度生で23％，48年度生で25％であった。これに次いで，「(1)専門書を読むため」を目的とするものが，49年度生で20％，48年度生で21％であった。これは，学生のなかで，教養志向型と，専門志向型がほぼ同率で対立していることを示して興味深い。この対立は，ある意味では，男女の対立でもある。すなわち，49年度生，48年度生のいずれも，男性は25％以上が専門志向型であるのに対し，女性は30％以上が教養志向型である。大学の大衆化が生んだ亀裂がここにも表われている。第3位に高率を示した目的は，「(8)必修となっているため」であり，いわば無目的，受身的に英語を学習している学生が，49年度生で18％，48年度生で20％もいることが明らかとなった。次いで，「(3)海外旅行，留学のため」を目的とするものが，49年度生で13％，48年度生で10％あり，更に，「(4)外国人との意見交換」を目的とするものも，49年度生で9％，48年度生で10％あり，受身型と積極型の間にも対立があることが明らかである。「(2)将来英語を必要とする仕事につくため」を目的としたものは，49年度生，48年度生とも7％であり，「(7)入社試験，大学院入試」を目的としたものも，49年度生で7％，48年度生で5％と，明確な実利的目的を持ったものが少ないのが注目される。反面，「(6)思考能力を高めるため」という古典的目的をあげたものも非常に少なく，49年度生で3％，48年度生で4％であった。

Q 8　英語学習への目的意識



以上の結果を全般的に眺めてみると，まず目的の多様化ということに注目しなければならない。上述のように男女間に，教養型，専門型の差がみられる以外は，学部別には明確な傾向性は認められず，個人がそれぞれ異なった目的で英語を学んでいるのが現状である。次いで，入社試験とか，海外旅行とか明確な目的よりは，教養，専門といった長期的目的の方が重視されていることが注目される。一面では，これは喜ぶべきことであるが，他方目的意識の曖昧性を物語るものであると解釈することもできる。このような状況のなかで，「英語専攻生」だけが，49年度生で64％，48年度生で57％の高率で将来英語を必要とする仕事につくことを目的としているのが注目される。

以上の如き目的意識の混乱のもとにあっては，大学として有効な対応策を立てることは難しい。授業の種類をふやし，個人選択の余地をふやして，様々な目的にかなったコースが選べるように努力する以外ないが，そのような対症療法と併行して，大学の大衆化の一面として捕え，抜本的な対策を模索する必要があろう。

Q 9　他の外国語学習との関係（全員回答）

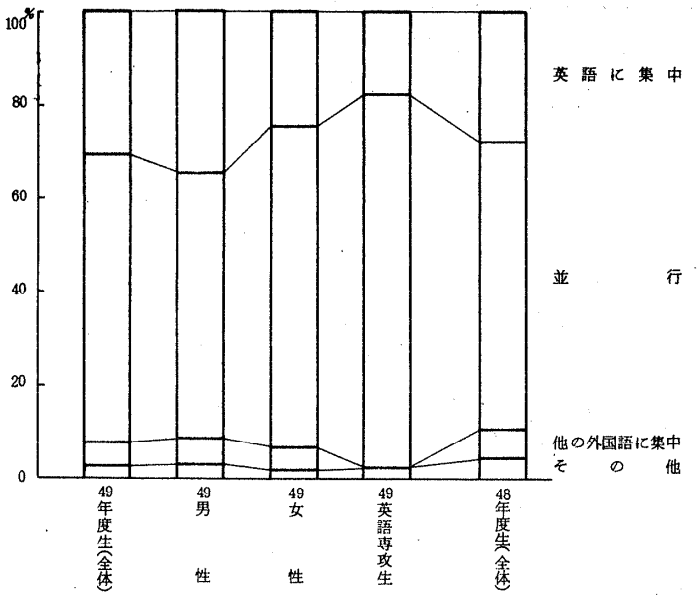
あなたは，英語の勉強と他の外国語の勉強との関係について，どのように考えていますか。

(1) 英語の勉強はやめて，他の外国語に集中したい。 (2) 英語と他の外国語を同時に並行して学びたい。 (3) 他の外国語はやめて，英語に集中したい。 (4) その他。

「(2)他の外国語と並行して学びたい」とするものがいちばん高率で，49年度生，48年度生ともに62％であるが，「(3)英語だけに集中したい」とする学生も，49年度生で31％，48年度生で28％あり無視できない。「(1)他の外国語に集中したい」とするものは，49年度生で5％，48年度生で6％と少ない。

学部差をみると，「(3)英語だけに集中したい」とする学生が，49年度生では，工学部，水畜産学部で，48年度生では，工学部で40％を越えている点に注目すべきである。また，文学部は49年度生でも48年度生でも，「(2)他の外国語との並行」を希望しているものが70％前後を占めており，他学部よりは高い率を示している。更に，「英語専攻生」も，49年度生で80％，48年度生で73％という高率で並行を支持しているのは興味深い。

Q 9　他の外国語学習との関係



男女差はあまり顕著ではないが，「(3)英語に集中したい」とするものが，49年度生と48年度生のいずれにおいても男性の方に高率であるのは注目される。すなわち，49年度生では，男性35％，女性24％であり，48年度生では，男性34％，女性18％であった。

Q 10　外国語必修制への意見（全員回答）

あなたは，第一外国語必修8単位（2年間）という現行制度についてどう思いますか。

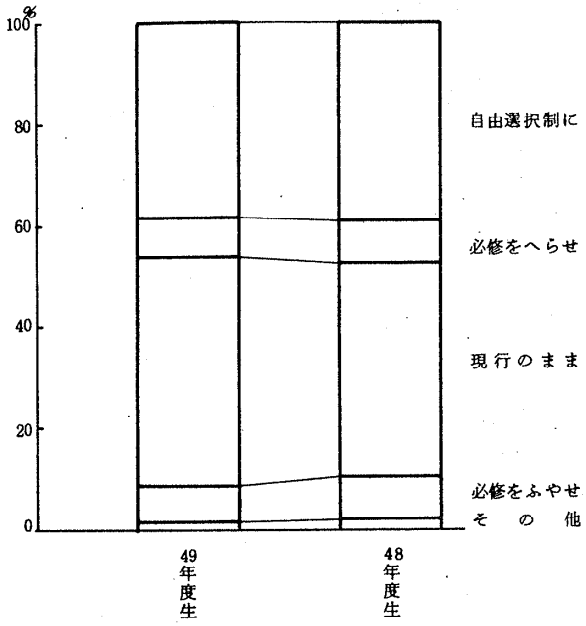
(1) 必修単位をふやすべきだ。 (2) 現行のままでよい。 (3) 必修単位をへらすべきだ。 (4) 全くの自由選択制にすべきだ。 (5) その他。

Q 8の場合と同様にこの質問でも，「(2)現行のままでよい」とするものが，49年度生で45％，48年度生で43％ある反面，「(4)全くの自由選択制にすべきだ」とするものが，49年度生で38％，48年度生で39％あり，分裂がみられる。また，「(1)必修単位をふやすべきだ」とするものが，49年度生で7％，48年度生で8％あるが，逆に，「(3)必修単位をへらすべきだ」とするものも，49年度生，48年度生ともに8％あり，対立している。

学部別では，「英語専攻生」が，49年度生で60％，48年度生で70％の高率で，「(2)現行のまま」を支持しているのに対し，政経学部第二部が，49年度生で46％，48年度生で54％の高率で「(4)自由選択制」を支持している。

男女差はあまり顕著ではないが，わずかながら女性に現状維持の傾向が強く，男性に自由選択制への志向が強いようである。すなわち，現状維持を選んだ女性は，49年度生で50％，48年度生で52％にのぼり，逆に自由選択制を求めた男性は，49年度生で40％，48年度生で41％になっている。

Q 10　外国語必修制への意見

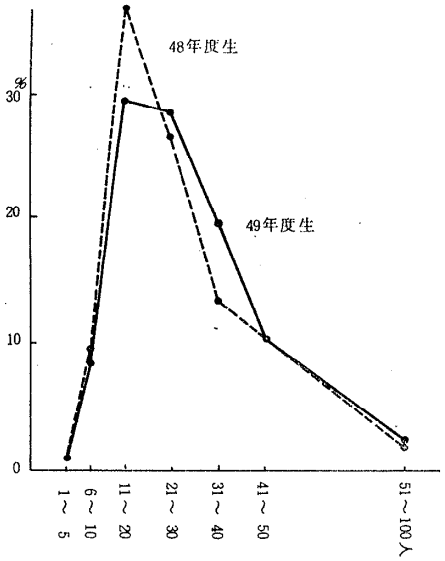


Q 11　クラス規模への希望（全員回答）

あなたは一般教育の英語の授業には，何人くらいのクラスが望ましいと思いますか。

この質問では，選択肢を与えず，希望する人数を記入させた。回答者によって希望する人数のばらつきは大きいが，49年度生で30人，48年度生で29人が平均値であった。学部差は顕著ではないので，全般的に30人前後のクラスを理想的と考えていると判断してよい。ただし，49年度生では，総合科学部が20人を希望し，48年度生では，文学部，「英語専攻生」が22人，政経学部第二部が21人を希望し，他よりは少人数のクラスを求めている。現状では50人をこえるクラスが大半を占めるのであるから，学生の希望には程遠いのが現実である。

Q 11　クラス規模への希望



Q 12　予習復習時間（全員回答）

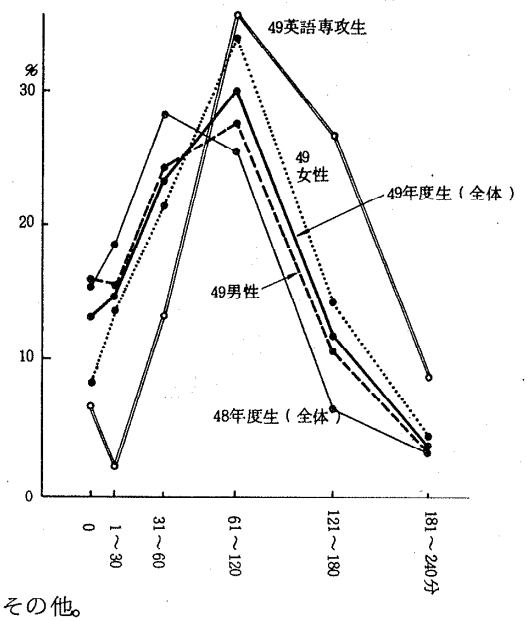
あなたは，一般教育の英語の授業のために，1クラス当たり週何時間くらい予習復習をしていますか。平均時間を記入して下さい。

この質問でも，選択肢を与えず，数字を記入させたが，その平均は，49年度生で90分，48年度生で76分であった。すなわち2年生になると，予習復習の時間がかなり少なくなっていることが明らかである。しかし，標準偏差値が，49年度生で75，48年度生で67と，個人差が大きく，時間をかけるものはかけ，かけないものはかけないという結果が明らかである。学部別では，49年度生では，文学部，教育学部，「英語専攻生」が140分と，他学部よりも時間をかけ，教育学部福山分校が56分と予習復習の時間が少ない。48年度生では，「英語専攻生」が131分，歯学部が110分で，他学部より時間をかけ，理学部が39分，工学部が51分と他学部より少ない。2年生になって理科系の学生の予習復習の時間がへるのは，実験で多忙になることに起因する

ものであろうか。また歯学部で逆に2年生が多くの時間を予習復習に費しているのは，進学への配慮であろうか。

男女差もかなり顕著で，49年度生では男性83分，女性102分，48年度生では，男性67分，女性89分と，いずれも女性の方が多くの時間を予習復習にかけていることが明らかである。

Q 12　予習復習時間



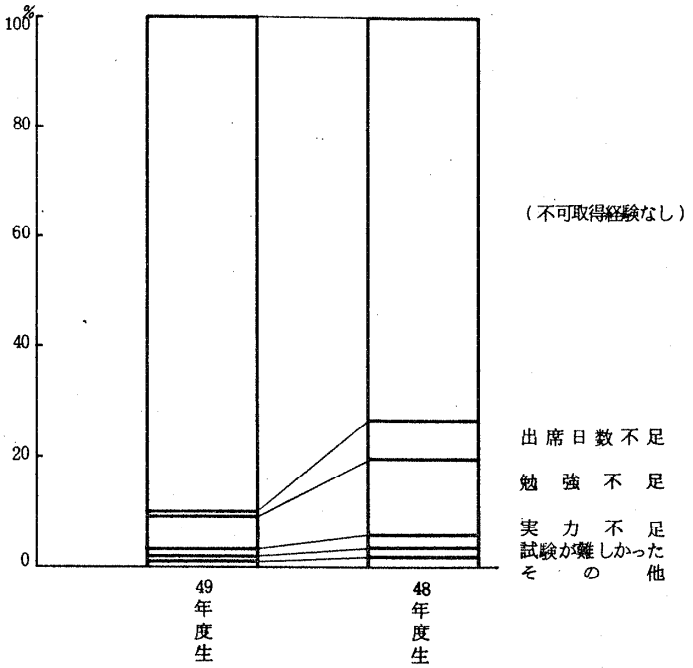
Q 13　不可取得の原因（全員回答）

あなたは，一般教育の英語の授業で，不可の評価を受けたことがありますか。もしあれば，そのもっとも主な原因だと思うものを，一つだけ選んで下さい。

(1) 出席日数不足，　(2) 勉強不足，　(3) 実力不足，　(4) 試験が予想より難しかった。　(5) その他。

まず，不可の評価を受けたことのあるものの比率を眺めると，49年度生で10%，48年度生で27%であった。すなわち，2年生になるにつれて，不可の評価を受けたものの数が加速度的に増加している。学部差をみると，49年度生では，政経学部第二部が28%で特に多く，文学部，政経学部が18%，水畜産学部が16%で目立つ。「英語専攻生」は0%，総合科学部は1%と極めて少なく，歯学部，教育学部，教育学部東雲分校，医学部も比較的少ない。48年度生では，工学部が47%，政経学部が38%，理学部が37%と，この3学部での加速度的増加が注目される。また特筆すべきは，「英語専攻生」の35%で，何か特殊な事情があったにもせよ，問題である。

Q 13　不可取得の原因



男女差をみると，49年度生では，男性13%，女性5%であり，48年度生では，男性44%，女性16%である。男性の方が圧倒的に不可の経験者が多く，2年生では半数に近いことがわかる。

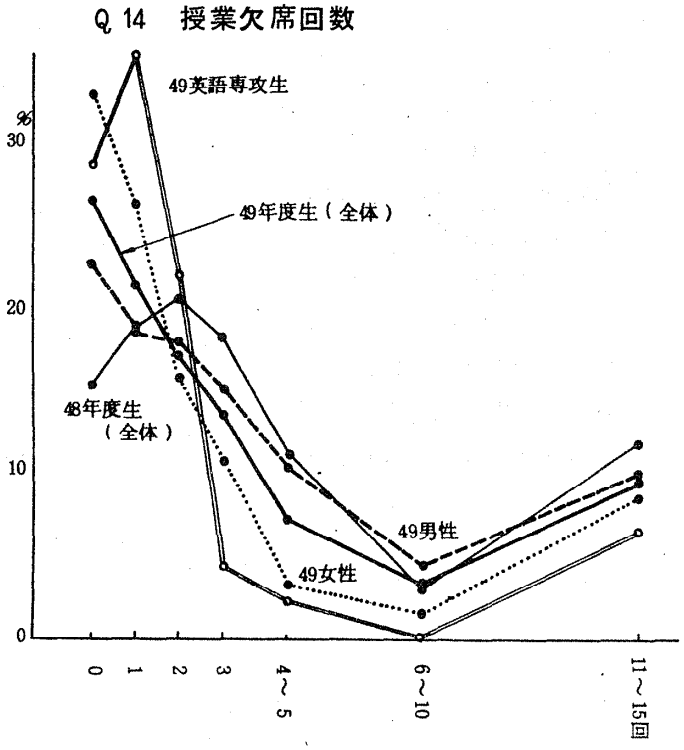
不可の評価を受けた原因としては，49年度生，48年度生ともに，「(2)勉強不足」を最大の原因としている。49年度生では，その他の理由をあげたものは，それぞれ全回答者の1%以下で問題になるまい。48年度生では，「(1)出席日数不足」を理由にあげたものが相当数にのぼっている。すなわち，「(2)勉強不足」をあげたものが，14%であったのに比べ，「出席日数不足」をあげたものが7%であった。その他の理由をあげたものは，それぞれ2%以下で問題になる

まい。

学部差を眺めると，49年度生では，文学部，医学部で「(1)出席日数不足」を理由としたものが他学部より多かった。48年度生では，政経学部，理学部で同様の傾向がみられた。また，「英語専攻生」が，「(3)実力不足」を最大の理由としている点が注目される。

Q 14　授業欠席回数（全員回答）

あなたは，一般教育の英語に関して，1クラス1学期15回の授業回数のうち，平均何回くらい欠席しますか。



この質問では，選択肢を与えず，欠席回数を記入させたが，その平均は，49年度生で2.9回，48年度生で3.5回であった。やはり2年生の方が欠席回数が多いことがわかる。1学期の授業の$\frac{1}{3}$以上，すなわち6回以上欠席するものは，49年度生で13％，48年度生で15％であり，欠席が無視できない問題であることがわかる。

学部差をみると，49年度生では政経学部第二部の平均5.3回，6回以上の欠席者33％が最高で，次いで歯学部の平均3.9回，6回以上の欠席者10％，政経学部の平均3.9回，6回以上の欠席者19％が続く。48年度生では，政経学部第二部の平均5.4回，6回以上の欠席者35％を最高に，政経学部の平均4.3回，6回以上の欠席者20％が続く。

男女差をみると，49年度生では，男性の平均が3.3回，6回以上の欠席者が15％であるのに対し，女性の平均が2.4回，6回以上の欠席者が10％である。48年度生では，男性の平均が3.8回，6回以上の欠席者が16％であるのに対し，女性の平均が3.1回，6回以上の欠席者が13％であった。すなわち，49年度生，48年度生のいずれにおいても，男性の方が欠席回数が多い事が明らかである。

Q 15　聴講授業形式（全員回答）

あなたは一般教育の英語で，次のうちどの形式の授業を聴講したことがありますか（現在聴講中のものを含む）。各形式について聴講経験の有無を答えて下さい。

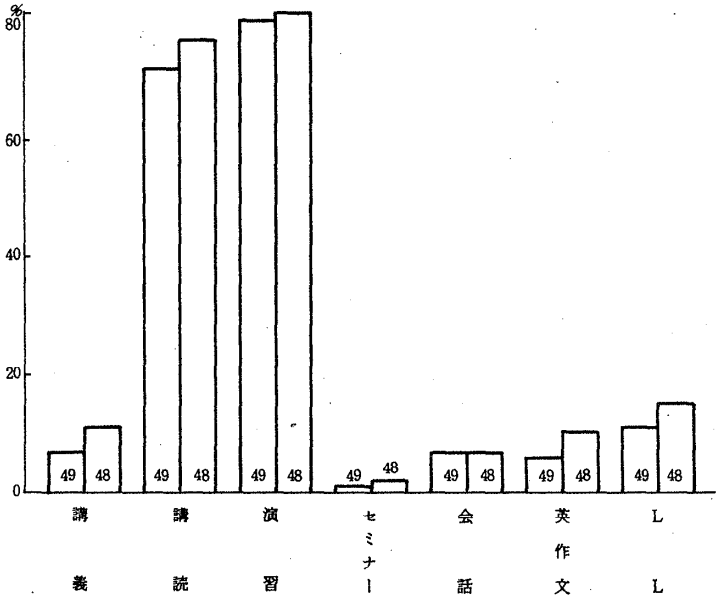
(1) 講義（あるテーマについて教師が英語で説明するもの）　1.ある。　2.ない。
(2) 講読（テキストを主として教師が日本語で解釈するもの）　1.ある。　2.ない。
(3) 演習（テキストを主として学生が指名されて訳すもの）　1.ある。　2.ない。
(4) セミナー（あるテーマについて小人数で議論するもの）　1.ある。　2.ない。
(5) 会話（学生と教師が英語で話し合うもの）　1.ある。　2.ない。

(6) 英作文（学生が日本文を英訳し，教師が訂正するもの）　1.ある。　2.ない。

(7) ＬＬ（語学演習装置等を使用するもの）　1.ある。　2.ない。

「(1)講義」を受けた経験のあるものは，49年度生で７％，48年度生で11％に過ぎない。「(2)講読」を受けた経験のあるものは，49年度生で72％，48年度生で77％である。「(3)演習」を受けた経験のあるものは，49年度生で80％，48年度生で81％である。「(4)セミナー」を受けた経験のあるものは，49年度生で１％，48年度生で２％と極めて少ない。「(5)会話」を受けた経験のあるものは，49年度生，48年度生のいずれも７％である。「(6)英作文」を受けた経験のあるものは，49年度生で６％，48年度生で10％である。「(7)ＬＬ」を受けた経験のあるものは，49年度生で11％，48年度生で15％である。以上の結果を総合すると，新しい試みのなかではＬＬが一番受講した人数が多く，最も前進しており，他はそれに及ばない。しかしＬＬもまだ十分定着したと言える段階ではなく，一般教育の英語の授業形式は，圧倒的に従来通りの講読と演習であることが明らかである。

Q 15　聴講授業形式



学生の自由選択があまり許されていない現状では，授業形式についての学部差は，論じても仕方のないことではあるが，新しい試みの恩恵に浴した学部は，総合科学部，「英語専攻生」などの非常に限られた所に集中しており，一般の学生にとって極めて残念な現状であることがわかる。

Q 16　希望の授業形式（全員回答）

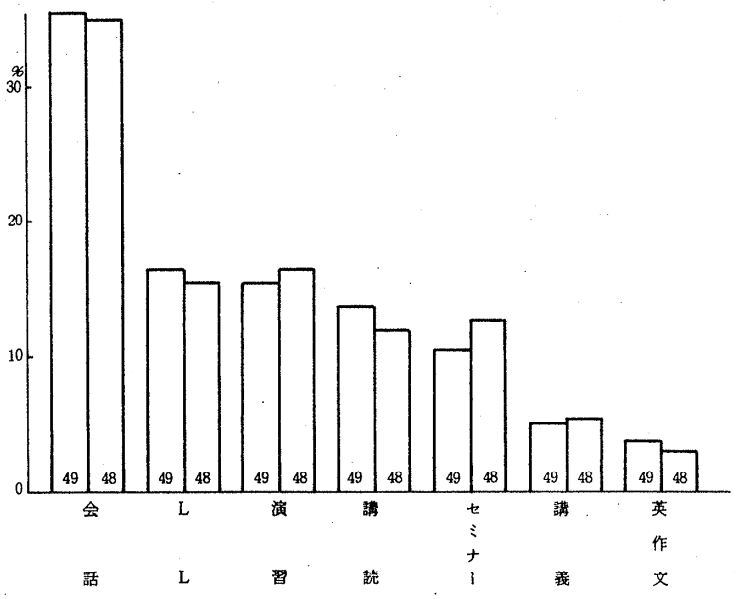
あなたは，これらの授業のうちどの形式のものが自分にとって有益だと思いますか。最大限２位までを選んで下さい。（未経験のものを選んでも構いません。）

(1) 講義。　(2) 講読。　(3) 演習。　(4) セミナー。　(5) 会話。　(6) 英作文。　(7) ＬＬ。

２位まで選択させた回答のうち，１位だけの集計結果によると49年度生，48年度生に共通したパターンは，35％前後の学生が「(5)会話」を希望し，これが第１位を占め，次いで「(7)LL」「(3)演習」がともに，それぞれ16％前後の学生に希望されて続き，「(2)講読」は13％前後の希望，「(4)セミナー」は12％前後の希望であり，「(1)講義」は５％前後，「(6)作文」が３％前後と極めて低い希望しかない事である。このようなパターンから判断すると，学生がいわゆる実用英語へ傾斜して，特に「聞く能力，話す能力」の訓練を求めていることがわかる。しかし，「書く能力」を目標にした英作文の希望が少ないのは注目に値する。これは学生の意識の盲点として解釈する以外にあるまい。あるいは，努力を要する作業を嫌う現代学生気質の一面かも知れない。講義に対する希望が少ないのも注目に値する。これは「聞く能力」が不十分で理解

しにくいことを学生が認めた結果であろう。従来の，講読，演習への希望は意外に根強いものがあることが明らかとなった。しかし，Q15で明らかになったように，現状では講読，演習が圧倒的に多いので，学生の実用英語への傾斜はその批判と考えるべきであろう。講読と演習の二つでは，明らかに演習の方を学生は希望している。

Q 16　希望の授業形式



この質問では相当顕著な学部差が出ることが予測されたが，意外と言える程，各学部が似たようなパターンを示した。例外的なデーターは，49年度生の政経学部第二部が34％の高率でＬＬを希望し，49年度の「英語専攻生」が，13％の率で講義を希望し，48年度の「英語専攻生」が32％の率でセミナーを希望していることである。学部差がほとんどみられなかったということは，英語の勉強と将来の専門分野での研究活動との関連を学生が具体的に考えていないことを物語るものであろう。

男女差も顕著なものはみられなかった。しかし，講読と演習の二つに限ってみると，49年度生，48年度生のいずれにおいても，男性は講読を希望するものが多く，女性は演習を希望するものが多かった。

Q 17　授業頻度・時間への意見（全員回答）

現在，一般教育の英語の授業は，原則として１クラス週１回，１００分授業の形式で行なわれていますが，あなたはこのことについてどう思いますか。

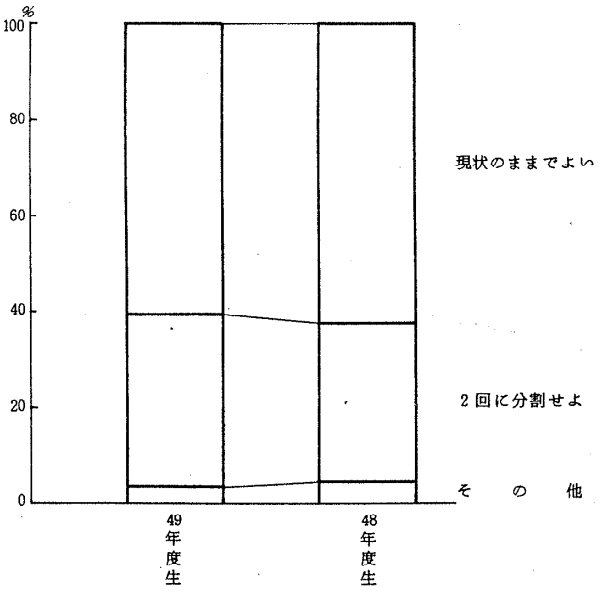
(1) 現状のままでよい。　(2) 1回５０分にして，週２回に分割した方がよい。

(3) その他。

「(1)現状のままでよい」とするものが，49年度生で61％，48年度生で63％にのぼった。「(2)分割した方がよい」とするものは，49年度生で36％，48年度生で33％であった。従ってわずかながら現状肯定が２年生に多いことがわかる。

この質問では，学部差，男女差がほとんど見られなかったなかで，49年度の総合科

Q 17　授業頻度・時間への意見



学部だけが，59％の高率で分割を支持しているのは注目される。しかし，その背景にある原因については，総合科学部が新設学部で，他学部とは異なった意識の学生が多いということ以外明らかではない。

Q 18　ＬＬ聴講経験（全員回答）

あなたは一般教育の英語でＬＬ（語学演習装置）による授業を聴講したことがありますか。もしあれば，その期間と週当り平均時間を記入して下さい。

ＬＬ聴講の代表的パターンは，49年度生，48年度生のいずれにおいても，１年間週２時間（１コマ）であった。これは現行の時間割がそのような制度となっており，ＬＬの授業についても例外的な措置がとられていないからである。

ＬＬを受けた経験者の学部別分布を聴講期間の集計表でみると，49年度生では，総合科学部が86％，「英語専攻生」が49％，教育学部が21％で，他学部はすべて10％以下である。48年度生では，「英語専攻生」が89％，文学部が27％，政経学部が22％，教育学部が21％，工学部が15％，医学部が11％で，他学部はすべて10％以下である。２年生になると，比較的多くの学部の学生がＬＬを経験していることが明らかであるが，それでもなお極めて限られた学生だけがＬＬを聴講する機会を与えられているにすぎない。

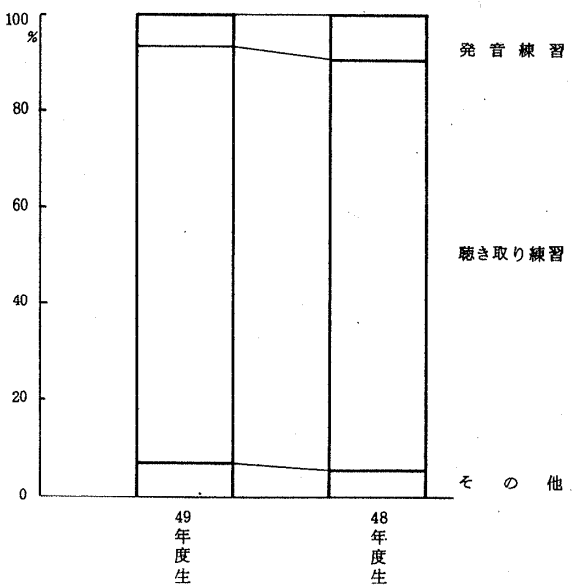
Q 19　ＬＬの目的（経験者のみ回答）

あなたが聴講したＬＬの授業は，主として何を目的としていましたか。下記のうちから１つだけを選んで下さい。

(1) 発音練習，　(2) 聴き取り練習，　(3) 基本構文の習得，　(4) 英語表現力の訓練，　(5) 講読用のテキストの補習，　(6) その他

ＬＬ授業の目的として，「(2)聴き取り練習」をあげたものが圧倒的に多く，49年度生で87％48年度生で85％であった。次いで，「(1)発音練習」をあげたものが，49年度生で６％，48年度生で９％であったが，その他の目的をあげたものはほとんどない。従って，現状ではＬＬが十分にその機能を果していないと考えざるを得ない。聞く能力の養成だけを目的とするものであれば，ＬＬのような複雑な装置は必ずしも必要ではない。基本構文の習得や，表現力の養成と言ったＬＬでなければできない面に将来の課題があることが明白である。

Q 19　ＬＬの目的



Q 20　ＬＬへの満足度（経験者のみ回答）

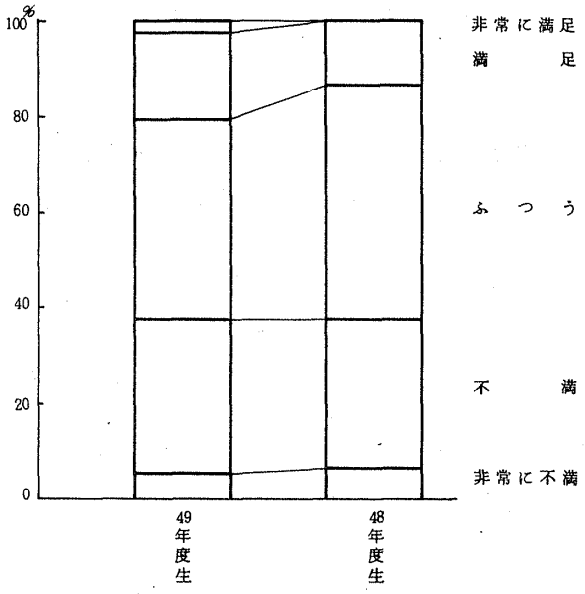
あなたは，ＬＬの授業にどの程度満足していますか。

(1) 非常に不満である。　(2) 不満である。　(3) ふつう。いずれとも言えない。　(4) 満足している。　(5) 非常に満足している。

「(3)ふつう」を選んだものがいちばん多く，49年度生で42％，48年度生で49％であった。次

いで，「(2)不満」を選んだものが，49年度生で32％，48年度生で31％であった。「(4)満足」を選んだものは，49年度生で18％，48年度生で14％に留まった。「(1)非常に不満」は，49年度生で６％，48年度生で７％，「(5)非常に満足」は49年度生で２％，48年度生で０％であった。以上の反応をＱ５の一般教育における英語の授業に対する全般的な満足度と比較すると，ＬＬ授業の方が相当満足度が高いことがわかる。しかし絶対的には，まだ根強い不満がＬＬ授業についても存在することが確認された。

Ｑ20　ＬＬへの満足度



Ｑ21　ＬＬへの不満の理由（不満の者のみ回答）

上の問いで，「(1)非常に不満である」または「(2)不満である」と答えた人は，特にどんな点に不満を感じましたか。最大限２位まで選んで下さい。

(1) 反復練習が単調だった。 (2) 内容が初歩的すぎた。 (3) 内容が高度で理解できなかった。 (4) 実際の会話には役に立たなかった。 (5) 講読等のテキストとの関連がなく，興味がもてなかった。 (6) その他。

２位まで選択させた回答のうち，１位だけの集計結果では「(4)実際の会話に役立たなかった」を不満の理由としてあげたものが圧倒的に多く，49年度生で40％，48年度生で42％にのぼっている。ＬＬの授業は直ちに会話に役立つことを本来の目的とするものではないが，ＬＬの授業内容の選定にあたっては一考を要するデーターである。次いで，「(1)反復練習が単調だった」を理由とするものが多く，49年度生で19％，48年度生で26％であった。反復練習は語学の習得に不可欠の要素であり，ＬＬの長所であるが，学生がこの長所を十分生かしていないことが明らかである。単調さは教材の工夫等により改善される面もあろう。他の選択肢は比較的低率であったが，49年度生では，「(2)内容が初歩的すぎる」が12％あり，逆に48年度生では，「(3)内容が高度で理解できなかった」が21％あった。ＬＬ授業にあたっては，現在のように学部専攻科目別単位の授業でなく，能力に応じて様々なレベルの授業が受けられるようにする必要性を物語っているものと思われる。

Ｑ22　ＬＬへの満足の理由（満足のもののみ回答）

上記Ｑ２０で「(4)満足している」または「(5)非常に満足している」と答えた人は，特にどんな点に満足していますか。最大限２位までを選んで下さい。

(1) 発音がよくなった。 (2) 聞く能力が向上した。 (3) 話す能力が向上した。 (4) 生きた英語に接することができた。 (5) 自習に便利だった。 (6) 他の授業よりも集中できた。 (7) その他。

２位まで選択させた回答のうち，１位だけの集計結果では「(2)聞く能力の向上」をあげたものがいちばん多く，49年度生で59％，48年度生で40％であった。次いで，49年度生は，「(4)生きた英語に接することができた」をあげたものが18％，「(6)他の授業よりも集中できた」をあ

げたものが，14％であったが，48年度生ではこの順序が逆で，「(6)他の授業よりも集中できた」をあげたものが40％にのぼり，「(4)生きた英語に接することができた」は13％に留まった。ＬＬの利用の仕方にまだ多くの問題があることが明らかである。

Q 23　ＬＬへの希望（経験者のみ回答）

あなたは，ＬＬ授業に対して，どんな希望を持っていますか。最大限２位までを選んで下さい。

(1) 授業時間を５０分単位にしてほしい。 (2) 自由に自習ができるようにしてほしい。 (3) 系統だったテープ教材を用意してほしい。 (4) 助言者として教師に常時指導を受けたい。 (5) テレビ等の視覚教材を併用してほしい。 (6) その他。

２位まで選択させた回答のうち，１位だけの集計結果では，「(2)自由に自習できるようにしてほしい」を求めたものがいちばん多く，49年度生で40％，48年度生で30％にのぼる。次いで，「(3)系統だったテープ教材を用意してほしい」を求めたものが，49年度生で19％，48年度生で20％である。更に，「(4)助言者として教師に常時指導を受けたい」を求めるものが，49年度生で18％，48年度生で19％あった。「(5)テレビ等の視覚教材を併用してほしい」を求めたものは，49年度生で８％，48年度生で14％であった。以上の結果を総合するとＬＬへの要望事項は相当広範囲にわたるものがあり，今後様々な方向へ発展して行かねば学生の希望をみたすことはむずかしかろうと想像される。しかし何よりも，従来の授業のわくに制限されずに，自由に利用できるようにすることが急務である。

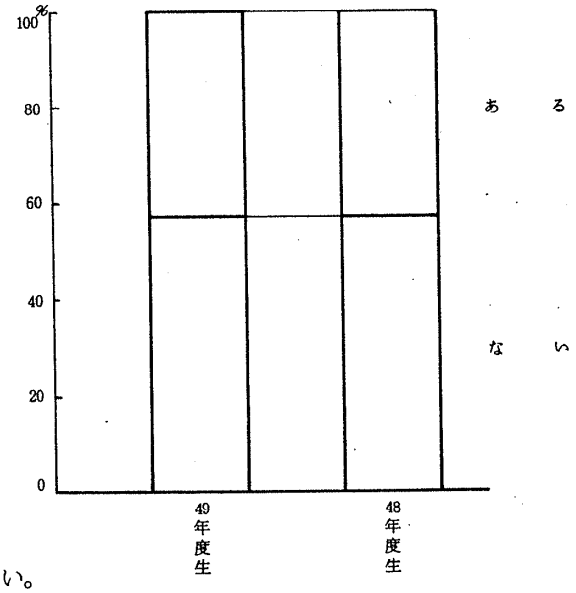
Q 24　テープ・レコーダーを使用した授業の聴講経験（全員回答）

あなたは，普通教室で行なわれる一般教育の英語の授業のうち，テープ・レコーダーを使用する授業を聴講したことがありますか。

(1) ある。 (2) ない。

テープ・レコーダーを使用する授業を聴講した経験のある学生は，49年度生，48年度生のいずれにおいても43％で，かなりの学生が聴講したことが明らかとなった。しかし，学部によってはその経験者がないところも散見される。これは担当教官の方針によるもので，学生の選択を示すものではない。

Q 24　テープ・レコーダーを使用した授業の聴講経験



Q 25　テープ・レコーダーを使用した授業の形式（経験者のみ回答）

あなたが聴講した授業では，テープ・レコーダーをどのような形で使用しましたか。中心的だったと思われる形式を１つだけ選んで下さい。

(1) 講読用のテキストの朗読を聞いた。 (2) 講読用のテキストの朗読を聞いたのち，発音練習をした。 (3) テープを中心に会話の練習をした。 (4) その他。

「(1)テキストの朗読を聞いた」が圧倒的に多く，49年度生で81％，48年度生で74％にのぼる。「(2)発音練習」をしたものは，49年度生，48年度生ともに８％に留り，「(3)会話の練習」をし

たものは，49年度生で１％，48年度生で２％しかいない。これはテープ・レコーダーを用いた授業がいわゆる聞きっ放しになっていることを物語るもので，もう少しの工夫が望まれる。

Q26　テープ・レコーダーを使用した授業への満足度（経験者のみ回答）

あなたは，テープ・レコーダーを使用する授業にどの程度満足していますか。

(1) 非常に不満である。 (2) 不満である。 (3) ふつう。どちらとも言えない。 (4) 満足している。 (5) 非常に満足している。

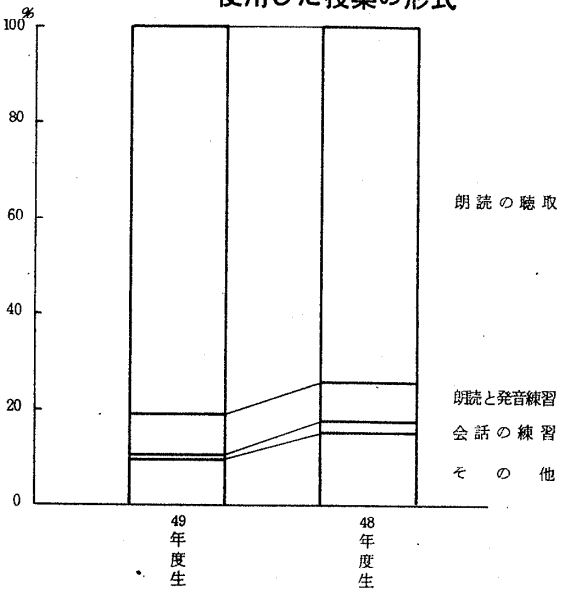
「(3)ふつう」をあげたものがいちばん多く，49年度生で57％，48年度生で61％にのぼる。「(2)不満」は，49年度生が20％，48年度生が14％である。「(4)満足」は，49年度生が16％，48年度生が20％であった。以上の結果から，２年生の方が満足度が高いことがわかる。一般の授業，ＬＬ授業の満足度と比較して，わずかながらテープ・レコーダーを使用する授業の方が好評のようである。これは講読の単調さを破ることになるからであろうか。

Q27　外人教師の授業の聴講経験（全員回答）

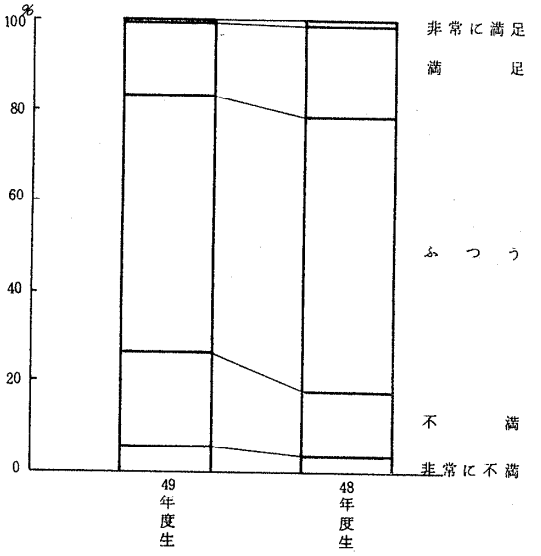
あなたは，一般教育の英語で，外人教師の授業を聴講したことがありますか。もしあれば，その期間と，週当り平均時間を記入して下さい。

聴講期間の集計表によれば，まず，注目すべきは，49年度生95％，48年度生92％が外人教師の授業を受けたことがない点である。現在の外人教師の数では，大半の学生はその授業を受ける機会に恵まれない訳で，何らかの対策が望まれる。また学部差をみると「英語専攻生」が49年度生で96％，48年度生で97％聴講しているが，その他は，文学部，教育学部が49年度生，48年度生ともに20％前後で続く他は，極めて少数の学生が散発的に聴講しているだけである。外

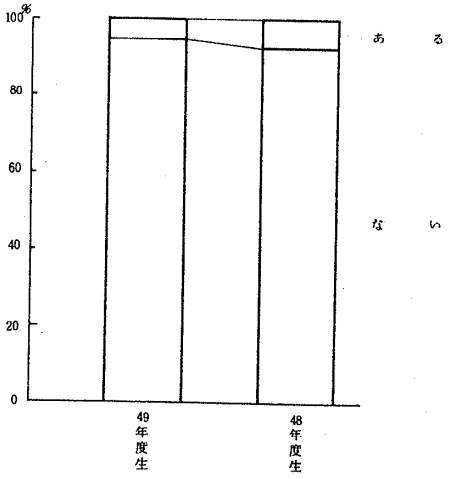
Q25　テープ・レコーダーを使用した授業の形式



Q26　テープ・レコーダーを使用した授業への満足度



Q27　外人教師の授業の聴講経験



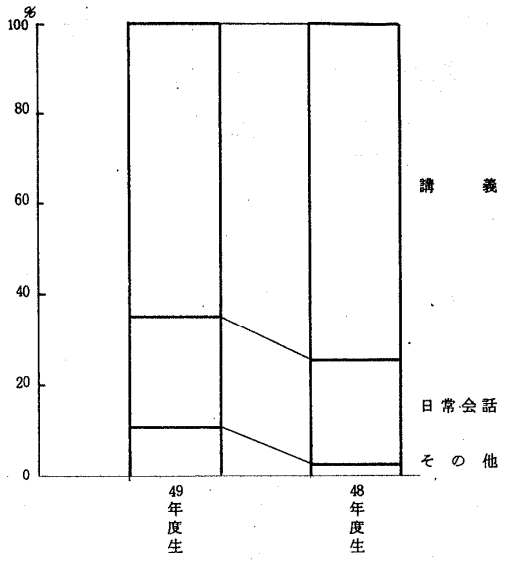
人教師の授業も選択の余地があまりないので，限られた学部の学生だけがその恩恵に浴することになるのであろう。従って，期間及び週当りの時間数も49年度生では１年１週２時間（１コマ），48年度生では１ないし２年１週２時間が典型的パターンである。

Q.28　外人教師の授業の内容（経験者のみ回答）

あなたが聴講した外人教師の授業は，どのような内容でしたか。下記のうちから一つだけを選んで下さい。聴講した外人教師の授業が２つ以上ある場合は，もっとも印象に残っている１つの授業について回答して下さい。

(1) 日常会話　(2) ＬＬ授業　(3) 英文講読　(4) 講義　(5) 英作文　(6) その他

Q.28　外人教師の授業の内容



「(4)講義」を受けたものが最も多く，49年度生で65％，48年度生で74％に及んでいる。次いで，「(1)日常会話」を受けたものが，49年度生で24％，48年度生で23％である。他の形式の授業を受けたものはほとんどない。現在の陣容では多様性に豊んだ授業を実行することは不可能であるが，講義が主体というのは，外人教師でなければ与えることのできない訓練を十分に与えているとは言えないであろう。

Q.29　外人教師の授業の効果（経験者のみ回答）

あなたは，外人教師の授業が特にどんな点で効果的だったと思いますか。最大限２位までを選んで下さい。

(1) 発音がよくなった。　(2) 聞く能力が向上した。　(3) 話す能力が向上した。　(4) 書く能力が向上した。　(5) 生きた英語に接することができた。　(6) 英米人の思想習慣が理解できた。　(7) その他。

２位まで選択させた回答のうち，１位だけの集計結果では，「(5)生きた英語に接することができた」をあげたものが最も多く，49年度生で53％，48年度生で49％である。次いで，「(2)聞く能力が向上した」をあげたものが多く，49年度生で44％，48年度生で48％であった。それ以外の効果を認めたものは極めて少数で問題外である。ＬＬの場合もそうであったが，外人教師の授業においても「話す能力」の向上は得られなかった訳で，現状では，英語で十分に意志を表現できる学生を，大学の授業のみによって養成することは絶望的と言わねばならない。

Q.30　外人教師の授業への意見（全員回答）

あなたは，今後外人教師の授業をふやすことについてどう思いますか。あなたの考えに最も近いものを１つだけ選んで下さい。

(1) 全学生が受講できるよう大幅にふやしてほしい。　(2) 希望する学生が受講できるくらいにふやしてほしい。　(3) 現状で十分である。　(4) 外人教師の授業に興味がないので，ふやすことに反対である。　(5) いずれとも言えない。

「(2)希望者が受講できるくらいにふやせ。」としたものが圧倒的に多く，49年度生で68％，48年度生で62％にのぼった。「(1)全員受講できるように大幅にふやせ」としたものも49年度生で20％，48年度生で28％あり，大多数の学生が外人教師の授業をふやすことを求めている。「(3)現状でよい」としたものは，49年度生で3％，48年度生で2％，「(4)興味がない」としたものは49年度生，48年度生のいずれにおいても1％であった。学生の外人教師への強い要望をみたすべく何らかの対策が急務であることが明白である。外人教師への要望については，学部差，男女差は顕著なものはみられない。ほぼ全員が同様の要求を持っていると想定される。

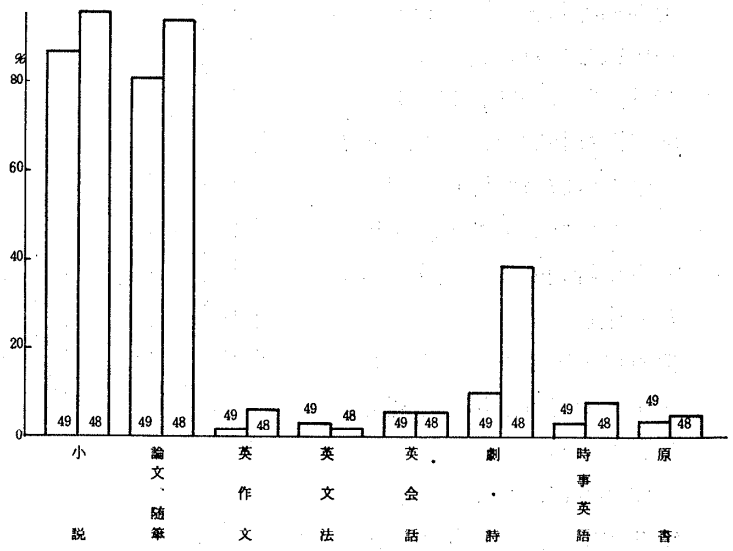
Q 31　使用教科書の種類・冊数（全員回答）

あなたは，一般教育の英語の授業で，どのような教科書を使用しましたか。下記の種類ごとに，使用した経験のあるものは，その冊数を記入して下さい。

(1) 小説　(2) 論文，随筆　(3) 英作文　(4) 英文法　(5) 英会話　(6) 劇・詩
(7) 時事英語　(8) 外国で出版された本（原書）　(9) その他

「(1)小説」を使用した経験のあるものがいちばん多く，49年度生で87％，48年度生で96％であった。冊数についてみると，49年度生では，1冊使用が41％，2冊使用が26％であり，48年度生では4ないし5冊使用が27％，3冊使用が25％，2冊使用が24％であった。年を追って使用小説の冊数はふえている。次いで，「(2)論文，随筆」を使用した経験者が多く，49年度生で81％，48年度生で95％であった。冊数についてみると，49年度生では，1冊使用が32％，2冊使用が28％であり，48年度生では4ないし5冊使用が22％，3冊使用が22％，2冊使用が29％であった。使用冊数なおいては多少劣るが，論文・随筆がほとんど小説と肩を並べるくらい使用されていることがわかる。この二つに比べると，その他の教科書はほとんど使用されていないと考えるべきである。すなわち，「(3)英作文」は49年度生で2％，48年度生で6％，「(4)英文法」は，49年度生で3％，48年度生で2％，「(5)英会話」は，49年度生，48年度生ともに6％，「(6)劇・詩」は，49年度生で10％，48年度生では39％，「(7)時事英語」は，49年度生で3％，48年度生で8％，「(8)原書」は，49年度生で4％，48年度生で5％であった。2年生になると多少色々な教科書を使用した経験のあるものがふえる傾向は認められるが，ほんのわずかである。ただし，「劇・詩」は2年生のうち39％が経験しており，特殊な傾向を示している。教科書の種類が「小説」，「論文・随筆」にほぼ限られるのは，教師の専門に起因すると想定されるが，一般教育の英語に対する固定化した概念があって，それが様々な教科書の使用を妨げていると思われる面もある。もう少し，全般的にバランスのとれた教科書の選定が望まれ

Q 31　使用教科書の種類



る。この質問では顕著な学部差はみられず，「小説」，「論文・随筆」に関する限りは極端なかたよりのない配慮がなされていることがわかる。しかし48年度生の「劇・詩」については，ほとんど使用したことのない学部と，80％以上の学生が使用した経験のある学部とあり，ばらつきが多い。これは担当教官の好みに左右される結果であろう。

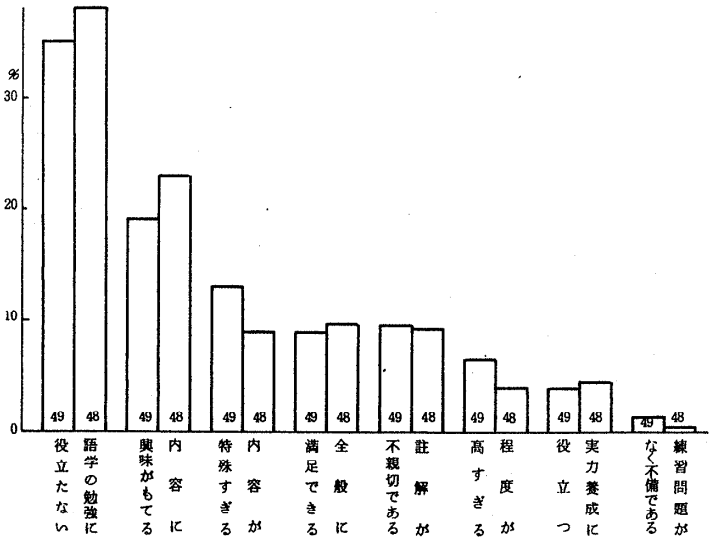
Q 32　使用教科書への評価（全員回答）

あなたは，一般教育の英語の教科書について，全般的にどのような印象を持っていますか。最大限２位まで選んで下さい。

(1) 内容に興味が持てる。 (2) 英語の実力養成に役立つ。 (3) 全般に満足できる。 (4) 内容が特殊すぎる。 (5) 程度が高すぎてむずかしい。 (6) 注解が不親切である。 (7) 語学の勉強にはあまり役立たない。 (8) 練習問題がないのが多くて不備である。 (9) その他 。

２位まで選択させた回答のうち，１位だけの集計結果では，「(7)語学の勉強にはあまり役立たない」をあげたものがいちばん多く，49年度生で35％，48年度生で38％にのぼる。次いで，「(1)内容に興味がもてる」をあげたものが，49年度生で19％，48年度生で23％であった。「(4)内容が特殊すぎる」は，49年度生で13％であったが，48年度生では９％にさがっている。これは１年生のとまどい を示すものであろうか。「(3)全般的に満足できる」，「(6)注解が不親切である」は，ともに 49年度生，48年度生のいずれにおいても９％前後であった。「(5)程度が高すぎる」は，49年度生で７％，48年度生で４％で，ここにもわずかながら１年生のとまどいらしきものが表われている。「(2)英語の実力養成に役立つ」，「(8)練習問題がない」は，いずれも，49年度生，48年度生双方において５％を割り極度に少なかった。現在の教科書が実力養成に役立つとは思わないが，練習問題の必要も切実に感じないというのは，あるいは現代の学生気質の一端であろうか。以上の結果を総合すると，現在の教科書は内容的にはある程度学生の興味をみたしているが，語学の勉強にはあまり役立っていないという印象を与えている。しかし，学生にはあまり具体的な改善要求はないようである。質問の選択肢の(1)〜(3)までを好意的評価と考え，(4)〜(8)を批判的評価と考え，その比率を比較してみると，49年度生では，32％が好意的であり，65％が批判的であった。48年度生では37％が好意的であり，60％が批判的である。１年生の方が批判的色彩が強いのは，新入生としてのとまどいや不慣れの影響があると思われる。２年生の方は逆にある程度の慣れを感じさせる。

Q 32　使用教科書への評価



学部別に眺めてみると，49年度生では，教育学部福山分校，水畜産学部がそれぞれ47％及び59％の好意的回答をしているのに対し，歯学部がわずかに

7％，「英語専攻生」が18％しか好意的回答をしていないのが注目される。48年度生ではそれほどの学部差はみられないが，「英語専攻生」が59％の好意的回答をしているのが注目される。学部差は担当教官の偶然的選択の影響もあるのであまり意味はないと思われる。

男女差を眺めると，49年度生で好意的回答をしたものは，男性30％，女性35％，48年度生では，男性35％，女性40％で，いずれも女性の方が多い点が注目される。

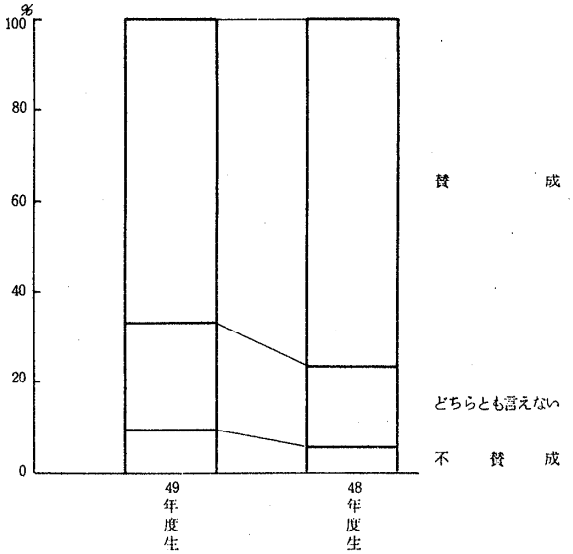
Q 33　授業選択制への意見（全員回答）

あなたは，自分にあった教科書が選べるように，一般教育の英語の授業を選択制にしてほしいと思いますか。

(1) 思わない。 (2) どちらとも言えない。 (3) 思う。

「(3)思う」と答えたものが圧倒的に多く，49年度生で67％，48年度生で76％にのぼる。「(2)どちらとも言えない」と答えたものは，49年度生で24％，48年度生で18％，「(1)思わない」と答えたものは，49年度生で9％，48年度生で6％であった。大多数の学生が選択制を希望し，しかも2年の方がその要望の強いことが明らかである。この質問では，学部別，男女別には顕著な傾向はみられなかった。「自由選択制」はかつて試みられたことがあるが，教科書の選択というよりは，単位の取得しやすい授業の選択に陥り，成功しなかった。このことを考えると，学生の希望はどのような方法で満たすことが可能であろうか。

Q 33　授業選択制への意見



Q 34　教科書への希望（全員回答）

あなたは，一般教育の英語の教科書について，どのような希望を持っていますか。最大限2位までを選んで下さい。

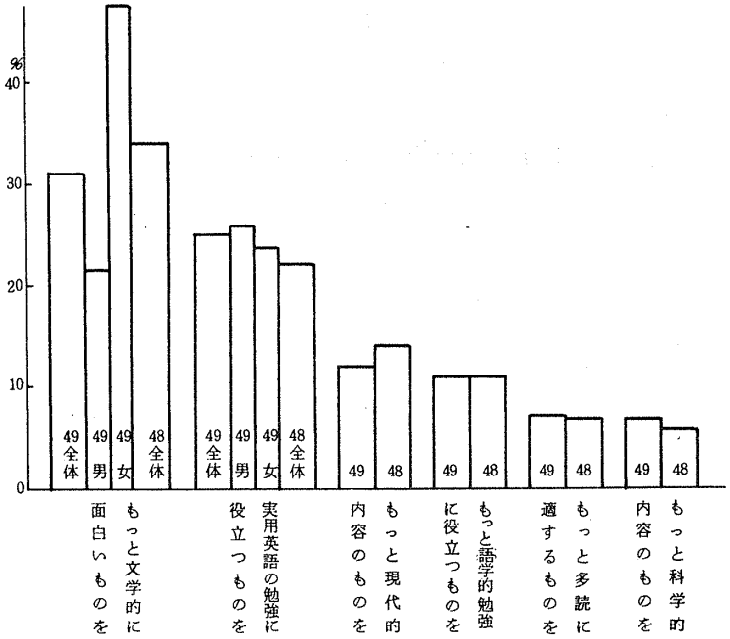
(1) もっと現代的内容のものを選んでほしい。 (2) もっと文学的に面白いものを選んでほしい。 (3) もっと科学的内容を持つものを選んでほしい。 (4) もっと語学的勉強に役立つものを選んでほしい。 (5) もっと多読に適するものを選んでほしい。 (6) もっと実用的英語の勉強に役立つものを選んでほしい。 (7) 外国の原書を教科書として使用してほしい。 (8) 註釈，解説の詳しいものを選んでほしい。 (9) その他。

2位まで選択させた回答のうち，1位だけの集計結果では，「(2)もっと文学的に面白いもの」を希望したものがいちばん多く，49年度生で31％，48年度生で34％であった。次いで，「(6)実用英語の勉強に役立つもの」を希望したものが多く，49年度生で25％，48年度生で22％であった。Q 8で明らかとなった目的意識の混乱が，文学と実用との対立となって表われたものと考えることができよう。「(1)もっと現代的なもの」を希望した学生は，49年度生で12％，48年度生で14％であり，「(4)もっと語学的英語の勉強に役立つもの」を希望した学生は，49年度生，48年度生のいずれにおいても11％であった。その他の希望を表明したものはすべて10％以下で問題にならない。

学部差をみると，当然のことながら文科系色の強い文学部，教育学部，教育学部東雲分校，

「英語専攻生」では，49年度生，48年度生ともに，「もっと文学的に面白いもの」を希望し，逆に実社会に深い関係のある政経学部，工学部，水畜産学部では49年度生，48年度生ともに，「もっと実用英語の勉強に役立つもの」を希望している。また49年度生では，総合科学部もこの傾向である。しかし，注目すべきは，理科系の理学部，医学部が，49年度生，48年度生ともに，「もっと文学的に面白いもの」を希望している点である。また，政経学部第二部，歯学部では，49年度生は「実用」を希望し，48年度生は「文学的に面白いもの」を要求して，希望が入れかわっている。

Q 34　教科書への希望



男女差をみると，女性は「文学的に面白いもの」を希望する傾向が強く，男性はどちらかと言えば「実用」を求める傾向が強い。

その他，49年度生の総合科学部が23％という高率で「(3)もっと語学的勉強に役立つもの」を希望して，他学部にみられない傾向を持っていることが注目される。

Q 35　英語教師への評価（全員回答）

あなたは，一般教育の英語教師について全般的にどのような印象を持っていますか。下記の1～8の各項目について，それぞれ該当するものを1つ選んで下さい。

1　(1)　全般的に好感がもてない。　(2)　どちらとも言えない。　(3)　全般的に好感がもてる。

2　(1)　教育に熱意がない。　(2)　どちらとも言えない。　(3)　教育熱心である。

3　(1)　学究的でない。　(2)　どちらとも言えない。　(3)　学究的である。

4　(1)　人間的魅力にとぼしい。　(2)　どちらとも言えない。　(3)　人間的魅力がある。

5　(1)　授業が下手である。　(2)　どちらとも言えない。　(3)　授業が上手である。

6　(1)　語学力が不十分である。　(2)　どちらとも言えない。　(3)　語学力にすぐれている。

7　(1)　学生に関心がない。　(2)　どちらとも言えない。　(3)　学生に関心がある。

8　(1)　他の専門分野の教師より見劣りがする。　(2)　どちらとも言えない。　(3)　他の専門分野の教師よりすぐれている。

9　その他。

まずこの質問に対する学生の回答で注目すべきことは，1～8の項目すべてにわたって49年度生，48年度生とも65％前後の高率で，「(2)どちらとも言えない」という回答があったことである。卒直に言ってこれは予想外のことであり，その原因についてはいくつかの仮説が考えられる。例えば，第一に上記の質問は，全般的に語学教師のイメージを求めたものであったので，

学生の大半が「全般的」な回答をすることがむずかしいと考えた。第2に，この質問が学生にとって唐突なものであり，戸惑いを感じさせるものであった。第3に，学生がいわゆる事なかれ主義に流れて，遠慮をした。第4に，質問の選択肢が学生の気持を十分に表現できるだけの陰影を欠いていた。第5に，学生が教師について判断できるほど接触がないと考えた。以上が考えられる仮説であるが，どれが決定的な要因であるかは速断できない。

さて，上述のように，「(2)どちらとも言えない」が予想以上の高率を示したことは事実であるが，幸いにこの質問の妥当性を欠くほどには高率でなかったと考えられる。そこで，1～8の項目について回答の趨勢を概観すると下記の如くなる。

項目1については，「(2)どちらとも言えない」と答えた学生は，49年度生で63％，48年度生で66％であり，「(3)全般的に好感がもてる」と答えたものが，49年度生で23％，48年度生で18％であった。「(1)全般的に好感がもてない」と答えたものは，49年度生で14％，48年度生で16％であった。従って，この項目では比較的肯定的な傾向が強いことがわかる。ただし，2年生では，かなりその傾向が弱くなっている。

項目2については，「(2)どちらとも言えない」と答えたものは，49年度生で68％，48年度生で67％であった。「(3)教育熱心である」と答えたものは，49年度生で18％あったが，48年度生では14％に下り，逆に，「(1)教育に熱意がない」と答えたものは，49年度生では14％であったのが，48年度生では19％にのぼっている。すなわち，この項目では肯定的傾向と，否定的傾向がほぼあい半ばしているが，1年生では肯定的傾向が強く，2年生では否定的傾向が強くなっている。

項目3については，「(2)どちらとも言えない」と答えたものは，49年度生，48年度生ともに65％であった。「(3)学究的である」と答えたものは，49年度生で23％，48年度生で18％であり，「(1)学究的でない」と答えたものは，49年度生で12％，48年度生で17％であった。従ってこの項目では肯定的傾向がかなり顕著であるが，2年生では，肯定と否定とがほぼ半ばしている。

項目4については，「(2)どちらとも言えない」と答えたものは，49年度生で55％，48年度生で53％であった。「(1)人間的魅力にとぼしい」と答えたものは，49年度生で27％，48年度生で33％であり，「(3)人間的魅力がある」と答えたものは，49年度生で19％，48年度生で14％であった。従って，この項目では否定的傾向が認められる。また，2年生では一層その傾向が強まっている。

項目5については，「(2)どちらとも言えない」と答えたものは，49年度生で71％，48年度生で67％であった。「(1)授業が下手である」と答えたものは，49年度生で22％，48年度生で29％であり，「(3)授業が上手である」と答えたものは49年度生で7％，48年度生で5％にすぎない。従って，この項目では，否定的傾向が強いことがわかる。他の項目と同様2年生では一層その傾向が強い。

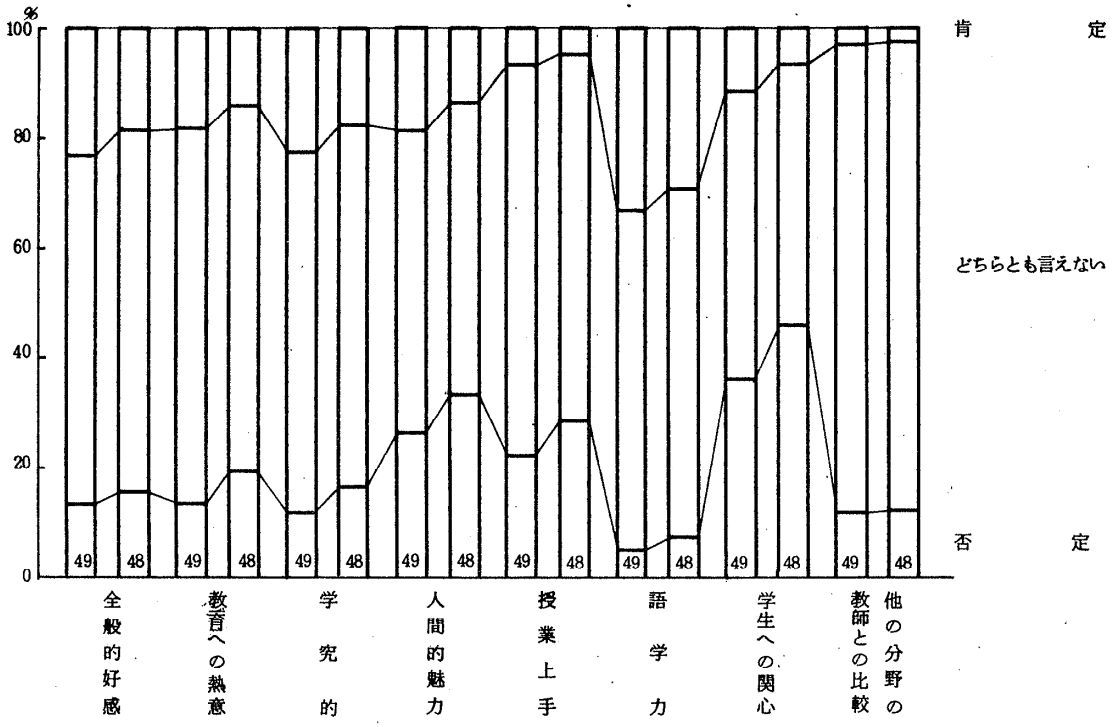
項目6については，「(2)どちらとも言えない」と答えたものが，49年度生で62％，48年度生で63％であった。「(3)語学力にすぐれている」と答えたものは，49年度生で33％，48年度生で29％あり，「(1)語学力が不十分である」と答えたものは，49年度生で5％，48年度生で7％にすぎない。従ってこの項目では，肯定的な傾向が顕著であり，2年生になってもその傾向はほとんど変らない。

項目7については，「(2)どちらとも言えない」と答えたものが，49年度生で53％，48年度生で48％であった。「(1)学生に関心がない」と答えたものは，49年度生で36％，48年度生で46％であり，逆に，「(3)学生に関心がある」と答えたものは，49年度生で11％，48年度生で6％で

あった。この項目では，中立の答えをした学生が比較的少ないことは注目すべきであろう。また，否定的傾向が極めて顕著であり，しかも2年生では圧倒的とも言い得るほどの率になっている。

項目8については，「(2)どちらとも言えない」と答えたものが，49年度生，48年度生ともに85％にのぼった。「(1)他の専門分野の教師より見劣りがする」と答えたものは，49年度生で12％，48年度生で13％であり，逆に，「(3)他の専門分野の教師よりすぐれている」と答えたものは，49年度生で3％，48年度生で2％であった。従って，この項目では大多数の学生が中立の答えを出したと考えるのが妥当であろう。

Q 35　英語教師への評価



以上各項目にわたって趨勢を概観したが，総合的に判断するために，否定，中立，肯定をそれぞれ1点，2点，3点とした場合の各項目ごとの平均値は次の通りである。

	49年度生	48年度生
1. 全般的好感	2.09	2.03
2. 教育への熱意	2.04	1.95
3. 学究的	2.11	2.01
4. 人間的魅力	1.92	1.81
5. 授業上手	1.84	1.76
6. 語学力	2.28	2.22
7. 学生への関心	1.75	1.60
8. 他の分野の教師との比較	1.91	1.90

この表から判断すると，「語学力にすぐれ」，「学究的であり」，「全般的には好感がもてる」が，「学生への関心は薄く」，「授業が上手とは言えない」，「人間的魅力にとぼしい」というのが広島大学における一般教育の英語教師に対して学生が持っているイメージと言えよ

う。「教育への熱意」，「他の分野の教師との比較」では中立的な答えが支配的であったと考えるべきである。

この質問における学部差は，さほど顕著ではないが，49年度生では，総合科学部，文学部，理学部等で比較的否定的傾向が強く，教育学部福山分校，医学部で肯定的傾向が多少みられる。48年度生では，全般に否定的傾向が強くなっているなかで，「英語専攻生」だけが肯定的傾向を強めているのが注目される。

この質問における男女差は，否定，中立，肯定をそれぞれ1点，2点，3点とした場合の男女の平均値をみることにより明らかになるが，49年度生では，男性2.0に対し，女性2.1であり，女性の方が肯定的傾向が強いことがわかる。しかし，48年度生は，男女ともに，1.9で差は認められない。

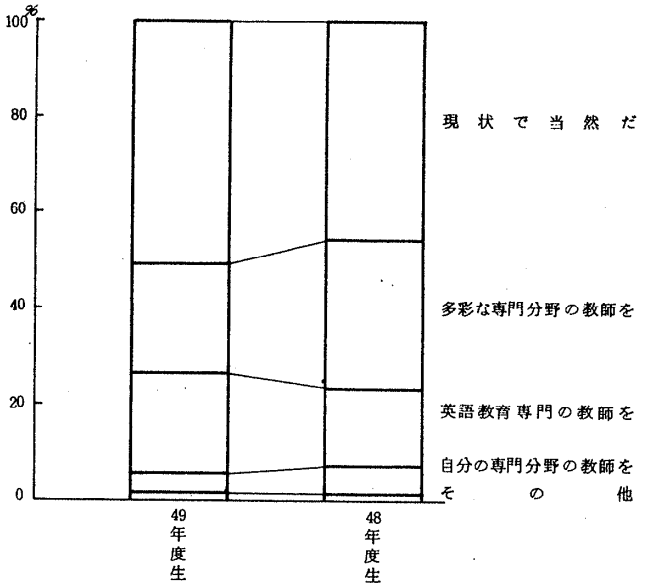
Q36　英語教師の専門分野への意見（全員回答）

現在一般教育の英語教師は主として英米文学や英米語学の研究者である場合が多いのですが，この点についてあなたはどう思いますか。あなたの考えにもっとも近いものを1つだけ選んで下さい。

(1) 当然のことと思う。 (2) もっと多彩な専門分野の教師がほしい。 (3) 英語教育専門の教師がほしい。 (4) 英語は自分の専門分野のすぐれた研究者から学びたい。 (5) その他。

「(1)当然のことと思う」と答えたものがいちばん多く，49年度生で51％，48年度生で46％にのぼった。次いで，「(2)多彩な専門分野の教師がほしい」と答えたものが，49年度生で23％，48年度生で31％であった。「(3)英語教育専門の教師がほしい」と答えたものは，49年度生で21％，48年度生で17％であった。「(4)自分の専門分野のすぐれた研究者から英語を学びたい」と答えたものは，49年度生で4％，48年度生で6％と，極めて少なかった。以上の結果から判断すると現状肯定派と，改革希望派がほぼ半ばしていることがわかる。

Q36　英語教師の専門分野への意見



学部別にみると，現状肯定的傾向が強いのは，49年度生では，文学部，医学部，「英語専攻生」であり，48年度生では，文学部，「英語専攻生」である。逆に，改革希望派が多いのは，49年度生では，総合科学部，政経学部，理学部であり，48年度生では，教育学部，政経学部，政経学部第二部である。

男女差を眺めると，49年度生，48年度生のいずれにおいても，現状肯定派は女性に多く，改革希望派は男性に多い。

Q37　課外の英語学習経験（全員回答）

あなたは，大学入学以後，課外に次のような形で英語を学んだことがありますか。もしあればその期間と週当り平均時間を記入して下さい。

(1) ＥＳＳ（英会話クラブ）などの課外活動。 (2) 会話学校。 (3) ラジオ，テレビ。
(4) 語学テープやレコード。 (5) 英字新聞や外国雑誌。

経験の有無を学習期間の集計表でみると，「(1)ＥＳＳ」については，49年度生，48年度生ともに，わずか４％の学生しか経験がない。しかし，学部差を眺めると，49年度生では，「英語専攻生」が29％，教育学部が12％，総合科学部が11％と高い率を示し，48年度生では「英語専攻生」のみが19％の率を示している。一方，週当りの活動時間をみると，49年度生，48年度生ともに，６時間以上10時間までのものがいちばん多い。従って，ＥＳＳについては，１年生の限られた学部の学生が中心であり，２年生では，「英語専攻生」を除いては脱落者が目立つが，活動に参加しているものは，かなりの時間をさいていることが明らかである。

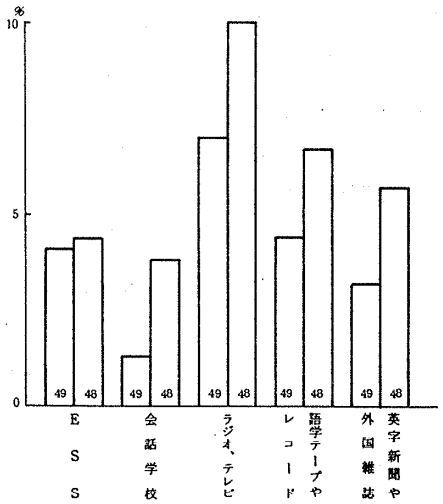
「(2)会話学校」についてみると，49年度生で１％，48年度生で４％の経験者がある。ほとんどの学生が経験がないことになるが，２年生になるとわずかながら経験者がふえているのは注目すべきである。これは主として２年の「英語専攻生」の24％が会話学校を経験していることに起因する。彼等の多くは週３時間を会話学校にさいている。

「(3)ラジオ，テレビ」についてみると，49年度生で.7％，48年度生で10％の経験者がある。学部差をみると，49年度の「英語専攻生」27％，総合科学部23％，48年度の「英語専攻生」35％，歯学部18％，政経学部16％等が高い率を示している。時間的には，49年度生では週１時間48年度生では週２時間がいちばん多い。

「(4)語学テープやレコード」についてみると，49年度生では４％，48年度生では７％が経験者である。これは予想外に低い率と言わなければならない。「英語専攻生」のみが，49年度生で27％，48年度生で22％の高い率を示しているが，他学部ではそれほどの差は認められない。ＥＳＳを除いて他の課外活動は２年生になってふえる傾向にあるが，語学テープやレコードは逆にへる傾向にある。これは教材の質的な制約に起因するものであろうか。時間的には，49年度生では週１時間又は２時間が多く，48年度生では週３時間が多い。

「(5)英字新聞や外国雑誌」についてみると，49年度生では３％，48年度生では６％が経験者である。これも予想外に低い率で，学部差でも「英語専攻生」が，49年度生で９％，48年度生で30％の率を示している他は，すべて低調である。時間的にも，49年度生，48年度生ともに週１時間というのがいちばん多い。これは，広島大学の学生の大半の目が外に向って開かれておらず，いわば鎖国状態が存在することを示していると言っても極論ではあるまい。

Ｑ37　課外の英語学習経験



以上，課外活動について明らかになったことを総合的に判断すると，１年よりは２年において多少増加の傾向はみられるにしても，全般的には極めて低調であり，大学の授業以外に英語の習得に努力している学生が少ないことが結論づけられよう。ただし，ＥＳＳにみられるように，努力している少数の学生は相当の時間をさいているので，努力する学生としない学生の間には大きな差が存在することがうかがわれる。当然のことながら，「英語専攻生」はこの点で他学部とは比較にならない努力をしていることが明らかである。

Ⅳ 結　　語

以上，アンケートの結果を質問別に概観したが，はじめに述べた我々の目的はほぼ満足できる形で達成できたと信じる。すなわち，

(1)学生の英語学習の実態調査では，大多数の学生が，講読または演習の形式で小説または論文，随筆を読み，1学期15週の授業のうちほぼ3回を欠席し，1回の授業のために80～90分の予復習をしていることが明らかとなった。そして全体のほぼ30％が2年までに不可の評価を受けている。課外活動での英語の習得は，熱心な少数の学生を除いては極めて低調であることがわかった。

(2)学生の学習意欲，目的意識の調査では，全体の7割近くの学生が消極的な勉強を認め，十分な意欲を欠いている。また，英語の学習に対する明確な目的意識を持たず，多様化，大衆化の傾向のなかで，教養，専門，実用などの諸目的の間で多くの学生が迷っているようである。しかし，他の外国語との関係では多くの学生が並行して学習することを希望している。

(3)学生の求めている学習形態では，まずクラスの規模を30人くらいにへらし，会話，ＬＬ等の実用面をふやし，講読よりも演習を希望していることが明らかである。しかし，週1回100分単位の授業は過半数の学生が是認している。また，大多数の学生が，教科書が選べるように自由選択制を求めている。

(4)既に行なわれている実験的試みの評価では，ごく限られた学部の学生のみがその恩恵に浴し，大多数の学生が置き去りにされていることが明らかである。ＬＬは，「聞く能力」の開発にのみ利用されて，十分その機能を果しているとは言い難く，外人教師の授業も，必ずしも「話す能力」の養成に役立っていないようである。テープ・レコーダーを用いた授業は比較的好評であるが，これも聞きっぱなしが多いことが明らかとなった。従って，新しい試みは，もっと組織的にかつ継続的に企画され，実施される必要がある。

(5)学生の学習態度に内在する諸問題では，過半数の学生が現在の英語教育に不満を持ち，教師に対しては，語学力，学究的態度の面ではある程度の満足を示しながら，教授方法，学生に対する関心，人間的魅力と言った面では不満を持っていることが明らかになった。しかも，不満は2年生になるほど強い傾向を示している。しかし，学生の側でも，このような不満をどのように解消したらよいのか，具体的な探求がなされておらず，自己の学習態度への反省は十分とは言えない。

以上が，このアンケートを通じて得られた結論である。あるいは，この結論は常識的であるかも知れない。しかし，各質問の回答の数値を読んでいただければ，常識的結論の背後にある細かな動きが忠実に統計化されていることが理解されると信ずる。学生自身の意見が，大学における英語教育の将来を決定する唯一の要因ではないことは言うまでもない。しかし，従来の提案がほとんど教師の側からのみなされたのが実状であるから，このアンケートは，従来の議論で欠けた部分を補足したものである。同時に，英語教育の将来の展望を開くためには，学生自身のもっと深化した自己反省が重要であることも，このアンケートは指摘するものである。

Ｖ　あ　と　が　き

この調査の企画実施にあたった広島大学大学教育研究センター英語教育プロジェクト・チームとしては，調査に応じて下さった学生諸君はもとより，貴重な授業時間を割いて調査の実施にご協力下さった総合科学部の先生方，その他御支援をいただいた多くの方々に深甚の謝意を表したいと思う。また，この調査の集計分析には，広島大学計算センターの電子計算機ＨＵＣ－Ⅱを使用したことを付記しておく。

われわれプロジェクト・チームは，さらに，この調査の回答と，各学生の学業成績等を対比しながら，より詳細な分析を計画しているが，その結果を得るには，なお数か月の時日を要する見通しなので，ここではとりあえず，各設問の基礎集計結果を中心に，中間的な報告を行なうにとどめた。

〔附記〕　一般教育における英語の授業の概要

このアンケートに回答した学生が受講した昭和48年度，49年度における英語の授業の概要は次の通りである。（昭和49年度に，教養部が総合科学部に改組されたことに伴ない，英語のカリキュラム等にも多少の変化があったので，48年度，49年度，および総合科学部生に分けて記述する。）

1. 授業科目

（48年度）英語

（49年度）英語Ⅰ，Ⅱ，英米文学特別演習。　（註）英語Ⅰは1年次生対象，英語Ⅱは2年次生対象とし，内容，程度に段階を設けた。英米文学特別演習Ⅰ，Ⅱは，英語専攻生を対象とする外国人教師による授業である。

2. 履修すべき単位数，年次等

（48年度）英語を第一外国語とする者は，毎週100分の授業を2回（2コマ）2単位を4期にわたって計8単位，英語専攻生は，更に外国人教師による授業を毎期1単位4期にわたって4単位，計12単位を履修する。英語を第二外国語とするものは，毎期2単位を2期にわたって計4単位履修する。

（49年度）大要においては48年度とほぼ同じであるが，英語を第一外国語とする者は英語Ⅰ，Ⅱを各4単位履修しなければならない。又，英語専攻生は，英米文学特別演習Ⅰ，Ⅱを各2単位履修しなければならない。

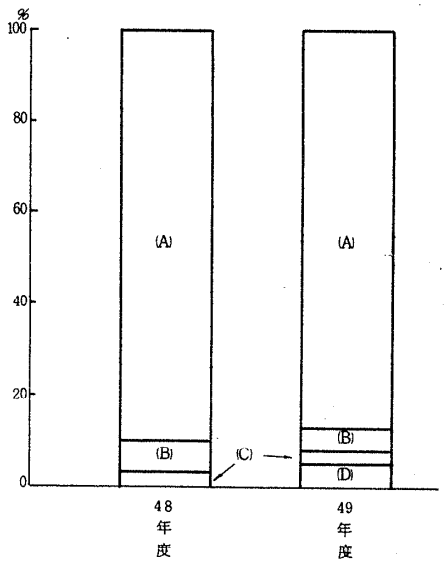
（総合科学部生）英語を第一外国語とする者は，英語Ⅰ4単位，英語Ⅱ2単位を毎期1単位6期にわたって履修し，かつ第5～7期に各コースにおいて開設される外書講読演習2単位を履修する。

3. 授業の種類

（48年度）英語の授業を，その内容，形式などに従って，(A)英文講読，(B)作文，会話，速読訓練，(C)LLの三種にわけた。　（註）開設コマ数の比率は，(A)90％，(B)7％，(C)3％であった。

（49年度）48年度の区分を次のように手直しした。(A)英文講読，(B)作文，(C)LL，(D)会話。（註）開設コマ数の比率は，(A)87％，(B)5％，(C)3％，(D)5％であった。

開設授業コマ数の比率



4. 履修の方法

（48年度）週2回の授業のうち，1回は学年，学部，学科，専攻単位に，曜日，時限担当教官，使用テクストが指定されたクラスを受講し，他の1回は，曜日，時限は指定されるが，その時限内にある限り，開設されているどの授業をも自由に選択受講できることとした。又，各時間帯になるべく(B)又は(C)の授業を設けるようにした。　（註）この試みは数年来行なわれて来たが，学生が単位の得やすい教官を選択するなど所期の目的にそぐ

わない面が見られたことや，クラス人数の極端なアンバランスが生じたことなどから，現在では廃止されている。

（49年度）授業はすべて指定クラスとした。ただし，週2回の授業のうち1回は(B)作文，(C)ＬＬ，(D)会話のいずれかを自由に選択できる。　（註）時間割編成上，(B)(C)(D)の授業は前年に比べて実質的に減っているが，開設クラスはいずれもほぼ定員一杯であった。

（総合科学部生）学習の目的に応じて，履修の型をＳ型（会話中心型）とＲＳ型（講読会話総合型）とに分け，学生はこのいずれかによって履修する。又，履修の内容と順序を次のように定めた。

Ｓ型：第1期ＩＣ，第2期ＩＤ，第3期ＩＢ，第4期ＩＣ，第5期ⅡＤ及び外書，第6期ⅡＤ及び外書。

ＲＳ型：第1期ＩＡ，第2期ＩＣ，第3期ＩＤ，第4期ＩＡ，第5期ⅡＡ及び外書，第6期ⅡＡ及び外書。

（註）総合科学部生には，このほかに作文と外国人教師による会話からなる専門科目，外国語特別演習（2～6単位）もあり，英語学習に対する関心と問題意識には非常に顕著なものがある。

5. 授業の内容

(A)（講読）　テキストはすべて教官によって選択採用される。授業は，テキストを主として教官が日本語で解釈するか，学生が指名されて訳すか，あるいは，これらの併用がほとんどである。又，一部の教官は多読，速読を目的とした授業をしている。

(B)（作文）　和文英訳，自由英作文，英文創作，語法演習，英文テキスト利用，などが行なわれている。

(C)（ＬＬ）　発音矯正，聴き取り能力の養成を主たる目的とした授業がほとんどである。ＬＬ演習が系統的にカリキュラムの中に組み込まれておらず，いわば恣意的，散発的になっている。正規の授業外に自由演習が設けられているが，受講者は少ない。

(D)（会話）　外国人教師による英米文学特別演習は，Ｉは英語専攻1年次生対象に語法のドリル，Ⅱは同2年次生対象に「ヨーロッパ文明」に関する講義である。外国人教師による授業は，又，一般学生対象に2クラスあり，日本人教官によるクラスも若干ある。ここでは，英文読物の解説，会話用テキストによるドリルなどが行なわれている。

6. 使用テキストの種類

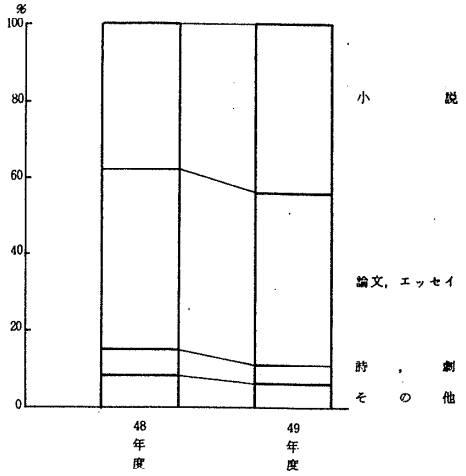
（48年度）小説38％，論文，エッセイ47％，詩，劇7％，作文，会話，その他8％。

（49年度）小説44％，論文，エッセイ45％，詩，劇5％，作文，会話，その他6％。

7. クラスの規模

1クラスの人数は，例外を除き，大体40～60名としてあるが，単位未修了者などのために，例えば48年度は平均57名であった。

使用テキストの種類



〔附録〕

大学における英語教育に関するアンケート　質問紙

お願い　大学における英語教育には，様々な問題が山積しています。このアンケートは，学生側からみてどのようなさし迫った問題があるかを調査し，英語教育の改善に資する目的で行なうもので，結果は，来年度中に大学教育研究センターの刊行物を通じて，学内外に公表する予定です。主として，回答用紙の回収を確認し，集計分析を学年別，学部学科別に行なうため，学生番号を記入していただくようになっていますが，個人の秘密を漏らしたり，学業成績の評価等に使用したりすることは一切ありませんから，卒直なご意見をお寄せ下さるようお願いします。

回答方法　以下の問いに対する回答は，すべて，回答用紙の該当欄に，数字や文章で記入していただくようになっています。質問に続いていくつかの回答が用意されている場合は，該当する項目を選んで，その番号を回答枠に記入して下さい。点で区切られた2桁以上の数字回答枠が用意されている場合，数字は必ず1桁ずつ枠にあてはめ，小数点がある回答枠では小数点位置が合うように，小数点がない回答枠では右端が一の位になるように記入して下さい。（記入例：性別 [2]，約 [1] . [5] 年間，週当たり平均約 [3] 時間。）また，ある問いへの回答如何によって，次に続くいくつかの問いに答えていただいたり，読み飛ばしていただいたりすることがありますので，回答は必ず問いの番号の順に行なうようにして下さい。

広島大学大学教育研究センター　英語教育研究プロジェクト・チーム

F 1　最初に，あなたの学生番号を回答用紙上端の所定欄に記入して下さい。その際，総合科学部生の学生番号は8桁ですから回答枠の左端から，他の学部の人は7桁ですから左端を1桁分あけて，記入して下さい。（記入例：[4 9 1 1 1 0 1]）。大学院生，聴講生等，一般の学部学生以外の人は，欄外にその事を注記して下さい。

F 2　あなたの所属学部等を記入して下さい。

F 3　あなたの性別を，下記のうちから選んで番号で記入して下さい。

1. 男　　2. 女

F 4　あなたの高校卒業年及び出身高校名を記入して下さい。最終卒業学校が高校以外の人は，具体的な事情がわかるように，余白なども利用して適宜記入して下さい。

次に，あなたの高校時代及び大学入学試験における英語についてお尋ねします。高等専門学校卒業者等，高校卒業者以外の人は，質問を適当に読みかえて，可能な限り回答して下さい。

Q 1　あなたは，高校時代に英語が好きでしたか。

1. 嫌いだった。
2. ふつう。どちらとも言えない。（「わからない」を含む。）

3. 好きだった。

Q 2　**上の問いで「 1.嫌いだった 」と答えた人**は，その理由を下記のうちから最大限 2 位まで選んで下さい。

1. 先生が嫌いだった
2. 教科書の内容が面白くなかった。
3. 授業内容がむずかしすぎた。
4. 性格的に英語になじめなかった。
5. 暗記することが多すぎて苦手だった。
6. その他（該当する場合は，回答枠に 6 を記入のうえ，その内容を欄外に注記して下さい)。

Q 3　あなたは，高校時代に次のような形で英語を学んだことがありますか。**もしあれば**，約何年間学んだか，平均して週当たり約何時間学んだかを記入して下さい。（期間の記入について，3 カ月以上 9 カ月未満の端数は 0. 5 年とし，3 カ月未満は切捨て，9 カ月以上は切上げとします。3 学期制高校における 1 学期間も 2 学期間も 0. 5 年とみなして下さい。また，時間の記入について，30分以上の端数は切上げ，未満は切捨てとします。50分授業は 1 時間，100分授業は 2 時間とみなしてさしつかえありません。）**もしなければ**，該当欄を空白にしておいて下さい。（空白欄は，経験がほとんどないものとみなしますので，注意して下さい。）

(1) ＬＬ（語学演習装置）を利用した授業。
(2) 外人教師の授業。
(3) ＥＳＳ（英会話クラブ）などの課外活動。
(4) 英語塾，予備校などの校外補習授業。

Q 4　あなたは，広島大学入学試験における英語の問題の難易度についてどう感じましたか。

1. むずかしかった。
2. ふつう。どちらとも言えない。
3. やさしかった。

以下の問いでは，大学における一般教育としての英語の勉強についてお尋ねします。

Q 5　あなたは，一般教育としての英語にどの程度満足していますか。

1. 非常に不満である。
2. 不満である。
3. ふつう。いずれとも言えない。
4. 満足している。
5. 非常に満足している。

Q 6　**上の問いで「 1.非常に不満である 」または「 2.不満である 」と答えた人**は，その理由を下記のうちから最大限 2 位まで選んで下さい。

1. 教師の教え方がまずい。
2. 教科書が面白くない。
3. クラスが大きすぎて集中できない。
4. 高校の授業の繰り返しである。
5. 英語に興味がないので面白くない。
6. 会話や英作文など実用的英語が少ないので不満である。
7. 専門書が読めないので興味がもてない。
8. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q 7　あなたは，大学入学後，英語の勉強に積極的に取り組んで来ましたか。

1. 非常に消極的だった。　　2. 消極的だった。

3. ふつう。いずれとも言えない。

4. 積極的だった。　　5. 非常に積極的だった。

Q 8　あなたは，主としてどんな目的で英語を勉強したいと考えていますか。最大限 2 位まで選んで下さい。

1. 専門書を英語で読むため。
2. 将来英語を必要とする仕事につきたいため。
3. 海外旅行や留学をしたいため。
4. 外国人と意見交換をしたり，自分の思想や研究を英文で発表したいため。
5. 英語を通して教養を広めたいため。
6, 英語を通して思考能力を高めたいため。
7. 入社試験，教員採用試験，大学院入試等に備えるため。
8. 大学で英語が必修科目となっているため。
9. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q 9　あなたは，英語の勉強と他の外国語の勉強との関係について，どのように考えていますか。

1. 英語の勉強はやめて，他の外国語に集中したい。
2. 英語と他の外国語を同時に並行して学びたい。
3. 他の外国語の勉強はやめて，英語に集中したい。
4. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q 10　あなたは，第一外国語必修 8 単位（ 2 年間）という現行制度についてどう思いますか。

1. 必修単位をふやすべきだ。　　2. 現行のままでよい。

3. 必修単位をへらすべきだ。　　4. 全くの自由選択制にすべきだ。

5. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q 11　あなたは，一般教育の英語の授業には，何人くらいのクラスが望ましいと思いますか。

Q 12　あなたは，一般教育の英語の授業のために，1 クラス当たり週何時間くらい予習復習をしていますか。平均時間を記入して下さい。

Q 13　**あなたは，一般教育の英語の授業で不可の評価を受けたことがありますか。もしあれば** そのもっとも主な原因だと思うものを，1 つだけ選んで下さい，

1. 出席日数不足　　2. 勉強不足

3. 実力不足　　4. 試験が予想より難しかった。

5. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q 14　あなたは，一般教育の英語に関して，1 クラス 1 学期約15回の授業回数のうち，平均何回くらい欠席しますか。

Q 15　あなたは，一般教育の英語で，次のうちどの形式の授業を聴講したことがありますか（現在

聴講中のものを含む）。各形式について聴講経験の有無を答えて下さい。

(1) 講義（あるテーマについて教師が英語で説明するもの）　1. ある。　2. ない。
(2) 講読（テキストを主として教師が日本語で解釈するもの）　1. ある。　2. ない。
(3) 演習（テキストを主として学生が指名されて訳すもの）　1. ある。　2. ない。
(4) セミナー（あるテーマについて小人数で議論するもの）　1. ある。　2. ない。
(5) 会話（学生と教師が英語で話し合うもの）　1. ある。　2. ない。
(6) 英作文（学生が日本文を英訳し，教師が訂正するもの）　1. ある。　2. ない。
(7) ＬＬ（語学演習装置等を使用するもの）　1. ある。　2. ない。

Ｑ１６　あなたは，これらの授業のうちどの形式のものが自分にとって有益だと思いますか。最大限２位までを選んで下さい。（未経験のものを選んでも構いません。）

1. 講義　2. 講読　3. 演習　4. セミナー
5. 会話　6. 英作文　7. ＬＬ

Ｑ１７　現在，一般教育の英語の授業は，原則として，１クラス週１回100分授業の形式で行なわれていますが，あなたはこのことについてどう思いますか。

1. 現状のままでよい。
2. １回50分にして，週２回に分割した方がよい。
3. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Ｑ１８　あなたは，一般教育の英語でＬＬ（語学演習装置）による授業を聴講したことがありますか。**もしあれば，**その期間と週当たり平均時間を記入して下さい。（端数の取り扱いはＱ３に準じ，大学での１学期間は0.5年とみなして下さい。また，５０分授業は１時間，100分授業は２時間とみなして下さい。）**もしなければ，該当欄を空白にしたまま，６ページ（回答用紙２ページ）のＦ５．Ｑ２４へ飛んで下さい**

Ｑ１９　あなたが聴講したＬＬの授業は，主として何を目的としていましたか。下記のうちから１つだけを選んで下さい。聴講したＬＬ授業が２つ以上ある場合は，もっとも印象に残っている１つの授業について回答して下さい。

1. 発音練習　2. 聴き取り練習　3. 基本構文の習得
4. 英語表現力の訓練　5. 講読用テキストの補習
6. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Ｑ２０　あなたは，ＬＬの授業にどの程度満足していますか。

1. 非常に不満である。　2. 不満である。
3. ふつう。いずれとも言えない。
4. 満足している。　5. 非常に満足している。

Ｑ２１　**上の問いで「1.非常に不満である」または「2.不満である」と答えた人**は，特にどんな点に不満を感じましたか。最大限２位までを選んで下さい。

1. 反復練習が単調だった。　　2. 内容が初歩的すぎた。
3. 内容が高度で理解できなかった。　　4. 実際の会話には役に立たなかった。
5. 講読等のテキストとの関連がなく，興味が持てなかった。
6. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q22　**上記Q20で「4.満足している」または「5.非常に満足している」と答えた人は，**特にどんな点に満足していますか。最大限2位までを選んで下さい。

1. 発音がよくなった。　　2. 聞く能力が向上した。
3. 話す能力が向上した。　　4. 生きた英語に接することができた。
5. 自習に便利だった。　　6. 他の授業よりも集中できた。
7. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q23　あなたは，ＬＬ授業に対して，どんな希望を持っていますか。最大限2位までを選んで下さい。

1. 授業時間を50分単位にしてほしい。
2. 自由に自習ができるようにしてほしい。
3. 系統だったテープ教材を用意してほしい。
4. 助言者として教師に常時指導を受けたい。
5. テレビ等の視覚教材を併用してほしい。
6. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Ｆ５　あなたの学生番号をもう一度記入して下さい。（記入方法は，Ｆ１と同じです。）

Ｑ２４　あなたは，普通教室で行なわれる一般教育の英語の授業のうち，テープ・レコーダーを使用する授業を聴講したことがありますか。

1. ある。　　2. ない。

「2. ない」と答えた人は，Ｑ２７へ飛んで下さい。

Ｑ２５　あなたが聴講した授業では，テープ・レコーダーをどのような形で使用しましたか。中心的だったと思われる形式を1つだけ選んで下さい。

1. 講読用テキストの朗読を聞いた。
2. 講読用テキストの朗読を聞いたのち，発音練習をした。
3. テープを中心に会話の練習をした。
4. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Ｑ２６　あなたは，テープ・レコーダーを使用する授業にどの程度満足していますか。

1. 非常に不満である。　　2. 不満である。
3. ふつう。いずれとも言えない。
4. 満足している。　　5. 非常に満足している。

Ｑ２７　あなたは，一般教育の英語で外人教師の授業を聴講したことがありますか。**もしあれば，**その期間と週当たり平均時間を記入して下さい（端数の取り扱いはＱ18に同じ）。**もしなければ，該当欄を空白にしたまま，Ｑ３０へ飛んで下さい。**

Ｑ２８　あなたが聴講した外人教師の授業は，どのような内容でしたか。下記のうちから１つだけを選んで下さい。聴講した外人教師の授業が２つ以上ある場合は，もっとも印象に残っている１つの授業について回答して下さい。

1. 日常会話　　2. ＬＬ授業　　3. 英文講読
4. 講義　　5. 英作文
6. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Ｑ２９　あなたは，外人教師の授業が特にどんな点で効果的だったと思いますか。最大限２位までを選んで下さい。

1. 発音がよくなった。　　2. 聞く能力が向上した。
3. 話す能力が向上した。　　4. 書く能力が向上した。
5. 生きた英語に接することができた。
6. 英米人の思想習慣が理解できた。
7. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Ｑ３０　あなたは，今後外人教師の授業をふやすことについてどう思いますか。あなたの考えにもっ

とも近いものを1つだけ選んで下さい。

1. 全学生が受講できるよう大幅にふやしてほしい。
2. 希望する学生が受講できるくらいにふやしてほしい。
3. 現状で十分である。
4. 外人教師の授業に興味がないので，ふやすことに反対である。
5. いずれとも言えない。

Q 31　あなたは，一般教育の英語の授業で，どのような教科書を使用しましたか。下記の種類ごとに，使用した経験のあるものは，その冊数（正確な数がわからなければ概数でもよい）を記入し，使用したことのないものは，該当欄を空白にしておいて下さい。（空白欄は，使用した経験のないものとみなしますので注意して下さい。）

(1) 小説
(2) 論文，随筆
(3) 英作文
(4) 英文法
(5) 英会話（発音練習を含む）
(6) 劇，詩
(7) 時事英語
(8) 外国で出版された本（原書）
(9) その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q 32　あなたは，一般教育の英語の教科書について，全般的にどのような印象を持っていますか。最大限2位までを選んで下さい。

1. 内容に興味が持てる。
2. 英語の実力養成に役立つ。
3. 全般に満足できる。
4. 内容が特殊すぎる。
5. 程度が高すぎてむずかしい。
6. 註解が不親切である。
7. 語学の勉強にはあまり役立たない。
8. 練習問題がないのが多くて不備である。
9. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q 33　あなたは，自分にあった教科書が選べるように，一般教育の英語の授業を選択制にしてほしいと思いますか。

1. 思わない。　2. どちらとも言えない。　3. 思う。

Q 34　あなたは，一般教育の英語の教科書について，どのような希望を持っていますか。最大限2位までを選んで下さい。

1. もっと現代的な内容のものを選んでほしい。
2. もっと文学的に面白いものを選んでほしい。
3. もっと科学的内容を持つものを選んでほしい。

4. もっと語学的勉強に役立つものを選んでほしい。
5. もっと多読に適するものを選んでほしい。
6. もっと実用的英語の勉強に役立つものを選んでほしい。
7. 外国の原書を教科書として使用してほしい。
8. 註釈，解説の詳しいものを選んでほしい。
9. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q 35 あなたは，一般教育の英語教師について，全般的にどのような印象を持っていますか。下記の(1)〜(8)の各項目について，それぞれ該当するものを1つ選んで下さい。その他，特に感じていることがあれば，(9)欄に記入して下さい。

(1) 1. 全般的に好感がもてない。 2. どちらとも言えない。 3. 全般的に好感がもてる。
(2) 1. 教育に熱意がない。 2. どちらとも言えない。 3. 教育熱心である。
(3) 1. 学究的でない。 2. どちらとも言えない。 3. 学究的である。
(4) 1. 人間的魅力にとぼしい。 2. どちらとも言えない。 3. 人間的魅力がある。
(5) 1. 授業が下手である。 2. どちらとも言えない。 3. 授業が上手である。
(6) 1. 語学力が不十分である。 2. どちらとも言えない。 3. 語学力にすぐれている。
(7) 1. 学生に関心がない。 2. どちらとも言えない。 3. 学生に関心がある。
(8) 1. 他の専門分野の教師より見劣りがする。 2. どちらとも言えない。
3. 他の専門分野の教師よりすぐれている。
(9) その他

Q 36 現在一般教育の英語教師は，主として英米文学や英米語学の研究者である場合が多いのですが，この点についてあなたはどう思いますか。あなたの考えにもっとも近いものを1つだけ選んで下さい。

1. 当然のことと思う。
2. もっと多彩な専門分野の教師がほしい。
3. 英語教育専門の教師がほしい。
4. 英語は自分の専門分野のすぐれた研究者から学びたい。
5. その他（該当する場合は，その内容を欄外に注記して下さい）。

Q 37 あなたは，大学入学以後，課外に次のような形で英語を学んだことがありますか。もしあれば，その期間と週当たり平均時間を記入して下さい（端数の取り扱いはQ18に同じ）。もしなければ，該当欄を空白にしておいて下さい。

(1) ＥＳＳ（英会話クラブ）などの課外活動。
(2) 会話学校。

(3) ラジオ，テレビ。

(4) 語学テープやレコード。

(5) 英字新聞や外国雑誌。

Q 38 その他，大学の英語教育について意見があれば書いて下さい。

F 1　学生番号：

総合科学部以外の学部学生は，ここから右側に記入して下さい。

大学における英語教育に関するアンケート　回答用紙

広島大学大学教育研究センター　英語教育研究プロジェクト・チーム

F 2　所　　属：＿＿＿＿＿学部＿＿＿＿＿＿＿学科課程＿＿＿＿＿＿＿専攻

F 3　性　　別：　　（男の人は 1.　女の人は 2.を記入して下さい。）

F 4　高校卒業年及び高校名：

昭和　　年 3 月＿＿＿＿都道府県＿＿＿＿＿＿＿高等学校卒業

Q 1

Q 2　1 位

2 位

Q 3　(1)　約　　・　　年間　　週当たり平均約　　時間

(2)　約　　・　　年間　　週当たり平均約　　時間

(3)　約　　・　　年間　　週当たり平均約　　時間

(4)　約　　・　　年間　　週当たり平均約　　時間

Q 4

Q 5

Q 6　1 位

2 位

Q 7

Q 8　1 位

2 位

Q 9

Q10

Q11　約　　人

Q12　週当たり平均約 □　時間 □ 分

Q13 □

Q14　平均約 □ 回

Q15 (1) □

(2) □

(3) □

(4) □

(5) □

(6) □

(7) □

Q16　1位 □

2位 □

Q17 □

Q18　約 □ . □ 年間　週当たり平均約 □ 時間

Q19 □

Q20 □

Q21　1位 □

2位 □

Q22　1位 □

2位 □

Q23　1位 □

2位 □

F 5　学生番号：

総合科学部以外の学部学生は，ここから右側に記入して下さい。

Q24

Q25

Q26

Q27　約　・　年間　週当たり平均約　時間

Q28

Q29　1位

2位

Q30

Q31 (1)　冊

(2)　冊

(3)　冊

(4)　冊

(5)　冊

(6)　冊

(7)　冊

(8)　冊

(9)　冊

Q32　1位

2位

Q33

Q34　1位

2位

Q35 (1) □

(2) □

(3) □

(4) □

(5) □

(6) □

(7) □

(8) □

(9)

Q36 □

Q37 (1) 約 □ ・ □ 年間 週当たり平均約 □ 時間

(2) 約 □ ・ □ 年間 週当たり平均約 □ 時間

(3) 約 □ ・ □ 年間 週当たり平均約 □ 時間

(4) 約 □ ・ □ 年間 週当たり平均約 □ 時間

(5) 約 □ ・ □ 年間 週当たり平均約 □ 時間

Q38

ご協力ありがとうございました。

大学研究ノート　　通巻21号

1976年1月　発行

広島大学・大学教育研究センター

730　広島市東千田町1丁目1－89

TEL（0822）41－1221

大学研究ノート・バックナンバー

第 1 号　(1971. 8)　サセックス大学のカリキュラム：自然科学系　ハンドブック1966－67より
……大学問題調査室〔編訳〕

第 2 号　(1971. 9)　ドイツの大学におけるInstitute数及び教授数に関する集計
……近藤春生

第 3 号　(1971. 10)　高等教育に関する主要外国雑誌目録，1971……岩村　聰〔編〕

第 4 号　(1972. 7)　欧米の医学カリキュラム……杉原芳夫〔編訳〕

第 5 号　(1972. 8)　アメリカ合衆国の主要大学に関する基本資料
……関　正夫・川上　昭吾〔編訳〕

第 6 号　(1973. 2)　サセックス大学のカリキュラム：人文・社会系　ハンドブック1966－67より
……大学教育研究センター〔編訳〕

第 7 号　(1973. 3)　諸大学学寮規程・規則集(1)……大学教育研究センター〔編〕

第 8 号　(1973. 8)　ドイツの大学改革と学生生活の現況　マールブルク大学を中心として
……千代田　寛・阪口　修平

第 9 号　(1973. 9)　広島大学医学部紛争における医局・講座，大学院および学位制度問題資料
……杉原芳夫〔編〕

第10号　(1974. 7)　理学部生物学科の調査－カリキュラムを中心に……川上昭吾

第11号　(1974. 2)　大学院・研究体制に関する文献目録……喜多村和之〔編〕

第12号　(1974. 2)　大学院・学位に関する規程集……喜多村和之〔編〕

第13号　(1974. 3)　アメリカ工業教育協会報告書：工学系学生のための教養教育
……関　正夫〔編訳〕

第14号　(1974. 3)　諸大学学寮規程・規則集(2)……大学教育研究センター〔編〕

第15号　(1974. 6)　農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する意識の調査・研究
農業高校生の進路選択と農業に関する意識の調査研究－普通高校生との比較－
……山谷洋二

第16号　(1974. 9)　カリフォルニヤ大学の農学系カリキュラム……山谷洋二〔訳〕

第17号　(1975. 1)　ヨーロッパの学生宿舎を見て……横尾壮英

第18号　(1975. 2)　学寮の管理運営の法的検討……畑　博行・村上　武則

第19号　(1975. 3)　大学院・学位制度に関する資料集……寺崎昌男〔編〕

第20号　(1975. 10)　大学の大衆化をめぐって……大学教育研究センター〔編〕

A QUESTIONNAIRE SURVEY ON COLLEGE ENGLISH EDUCATION

Students' Opinions at Hiroshima University

CONTENTS

I. The Aim of the Questionnaire Survey . . . . . (1)

II. The Planning and Execution of the Questionnaire Survey . . . . . (1)

III. A Detailed Analysis of the Data . . . . . (2)

Q1 Students' Response to English at High School
Q2 Reasons for Disliking English at High School
Q3 Types of Class Work at High School
Q4 Students' Impressions of the Entrance Examination
Q5 Students' Response to English at the University
Q6 Reasons for Disliking English at the University
Q7 Degree of Positive Interest in the Study of English
Q8 Students' Motivation in the Study of English
Q9 Students' Interest in Other Foreign Languages
Q10 Students' Opinions of English as a Compulsory Subject
Q11 The Desirable Size of a Class
Q12 Hours of Preparation and Review Spent at Home
Q13 Reasons for Failing Courses in English
Q14 The Number of Classes Missed
Q15 Types of Class Work at the University
Q16 Types of Class Work Desired by Students
Q17 Students' Opinions on the Length and Frequency of a Class
Q18 Hours Spent in the Language Laboratory
Q19 Aims of Language Laboratory as Understood by Students
Q20 Students' Response to Language Laboratory Courses
Q21 Reasons for Disliking Language Laboratory Course
Q22 Reasons for Liking Language Laboratory Courses
Q23 Students' Preference for Language Laboratory Courses
Q24 Hours Spent in Classes in which a Tape-Recorder Is Used
Q25 Different Uses of the Tape-Recorder
Q26 Students' Response to Classes in which a Tape-Recorder Is Used
Q27 Hours Spent in Classes Taught by a Native Speaker
Q28 Types of Classes Taught by a Native Speaker
Q29 Merits of Classes Taught by a Native Speaker
Q30 Students' Opinions on Increasing the Number of Classes Taught by a Native Speaker
Q31 Types of Reading Materials Used
Q32 Students' Opinions of Textbooks
Q33 Students' Opinions on the Desirability of Greater Freedom in the Choice of Textbooks
Q34 Students' Preference for Textbooks
Q35 Students' Rapport with the Instructors of English
Q36 Students' Opinions on the Academic Qualifications of the Instructors of English
Q37 Students' Participation in Extra-Curricular Activities

IV. Conclusion . . . . . (27)

V. Epilogue and Acknowledgements . . . . . (28)

Appendix: Some Facts on the Present Condition of English Education at Hiroshima University . . (29)

NOTES ON HIGHER EDUCATION
No. 21 (January 1976)

A Questionnaire Survey on College English Education

—Students' Opinions at Hiroshima University—

Jiro Igarashi, Katsuhiko Inada,
Satoshi Iwamura, Reiji Fujimoto,
Nobuyuki Yuasa

RESEARCH INSTITUTE FOR HIGHER EDUCATION
HIROSHIMA UNIVERSITY Hiroshima, Japan